

ガランドヤ古墳群

大分県日田市所在装飾古墳の調査報告



奈良文化財研究所



10127310F

1986

日田市教育委員会

1986
57

日田市教育委員会

日田市教育委員会

ガランドヤ古墳群 正 誤 表

ページ	訂正箇所	誤	正
5	上から4行目	流域	上流
11~12	第6図奥壁図		下図
13	下から7行目	本格的	本来的
28	上から2行目	(1) 現状と墳丘	(1) 現状及び周溝
29	上から6行目	部々	部分
41	下から11行目	壁画	壁面
図版13	右側下から2コマ目	天地逆	

ガランドヤ古墳群



序 文

日田市は三隈川河畔に開けた風光明美な水郷であります。そうした中で、多くの遺跡や旧跡が残され、市民の恰好の歴史教材として、また歴史研究の資料として生かされております。ガランドヤ古墳もそうした遺跡の一つで、石室に装飾がある為、夙に有名がありました。

しかし、長年の間に封土は流出し、原形を失ない、近時装飾にも重大な影響を与えるようになっており、早急な保存対策を迫られる状況となりました。日田市教育委員会といたましても、この事態を憂慮し、県文化課の御協力を得て基本資料作製の為の調査を実施するに至りました。

この度はその成果を報告書にまとめることになりました。本書がガランドヤ古墳の今後の保存対策の一助となり、さらに広く文化財保護思想の普及に活用されますならば、幸いです。最後になりましたが、終始熱心に御指導御協力頂いた多くの方々に衷心よりお礼を申し上げます。

昭和 61 年 3 月

日田市教育委員会

教育長 檜 原 芳 彦

例　　言

1. 本書は日田市教育委員会が国・県の補助を得て昭和59年度および60年度に実施した重要遺跡確認調査の調査報告書である。
2. 発掘調査は日田市教育委員会が主体となり、県文化課の協力を得て実施したものである。
3. 発掘調査中下記の方々の来跡を仰ぎ、貴重なご助言、ご指導を得たことを明記する。

小林 行雄 氏（京都大学名誉教授）

森 貞次郎 氏（九州産業大学教授）

八賀 晋 氏（三重大学教授）

西谷 正 氏（九州大学助教授）

河原 純之 氏（文化庁）

黒崎 直 氏（文化庁）

伊藤 稔 氏（文化庁）

江本 義理 氏（東京国立文化財研究所）

4. 石室の実測にあたり、徳永貞紹、高田浩善両君（熊本大学）の協力を得た。
5. 本書の執筆は第Ⅲ章 3. 自然科学的調査(2)顔料分析を除いて調査員で分担し、執筆者は各項目の最後に示した。なお、顔料分析については江本氏のお手を煩わせた。
6. 本書に使用した写真は図版12（上）を除いて段上、土居、小柳が撮影した。
7. 本書の編集は小柳が行った。

目 次

序 文	
例 言	
第Ⅰ章 はじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
3 調査団の構成	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	5
第Ⅲ章 調査の結果	9
1 第1号墳	9
(1) 現状及び周溝	9
(2) 主体部	9
(3) 壁 画	13
(4) 遺 物	15
2 第2号墳	28
(1) 現状及び周溝	28
(2) 主体部	29
(3) 壁 画	30
(4) 遺 物	30
3 自然科学的調査	38
(1) 温湿度測定	38
(2) 顔料分析	40
第Ⅳ章 大分県の彩色系装飾古墳	41
第Ⅴ章 まとめ	45
1 年代について	45
2 壁画について	46
	(P)

挿図目次

第1図 遺跡位置図	6
第2図 周辺の地形	7
第3図 日田盆地の古墳分布と郷の設定	7
第4図 古墳位置図	8
第5図 第1号墳トレンチ配置図	10
第6図 第1号墳石室実測図	11~12
第7図 第1号墳閉塞施設	13
第8図 第1号墳壁画番号図	14
第9図 第1号墳遺物出土状態	15
第10図 第1号墳出土土器(1)	16
第11図 第1号墳出土土器(2)	17
第12図 第1号墳出土馬具(1)	19
第13図 第1号墳出土馬具(2)	20
第14図 第1号墳出土馬具(3)	21
第15図 第1号墳出土馬具(4)	22
第16図 第1号墳出土馬具(5)	23
第17図 第1号墳出土鐵鎌	24
第18図 第1号墳出土鐵器	25
第19図 第1号墳出土装身具	25
第20図 第1号墳出土中世遺物	27
第21図 第2号墳トレンチ配置図	28
第22図 第2号墳トレンチ断面図	29
第23図 第2号墳石室実測図	31~32
第24図 第2号墳遺物出土状態	33
第25図 第2号墳出土土器	33
第26図 第2号墳出土鏡	34
第27図 第2号墳出土鐵器	35
第28図 第2号墳出土装身具(1)	36
第29図 第2号墳出土装身具(2)	37
第30図 月別平均温度	38
第31図 月別平均湿度	38
第32図 クリモグラフ	39

表目次

第1表 第1号墳出土玉類観察表	26
第2表 第2号墳出土玉類観察表	37
第3表 第1号墳出土土器観察表	50
第4表 第2号墳出土土器観察表	51
(P)	

図版目次

図版1 空中写真	
図版2 日田盆地遠望	
図版3 第1号墳近景(上、東から・下、南から)	
図版4 第1号墳発掘調査前(上・下)	
図版5 第1号墳奥壁(上)・第1号墳玄室床面(下)	
図版6 第1号墳玄門(上)・第1号墳羨門(下)	
図版7 第1号墳奥壁上部(上)・第1号墳櫛石上部(下)	
図版8 第1号墳側壁(上)・第1号墳側壁(下、後補の状況)	
図版9 第1号墳前室側壁(上)・第1号墳前室床面(下)	
図版10 第1号墳閉塞施設(上)・ 第1号墳遺物出土状態(中・下)	
図版11 第1号墳遺物出土状態	
図版12 第1号墳壁画(上・下)	
図版13 第1号墳壁画(部分)	
図版14 第2号墳遠景(上)・第2号墳近景(下)	
図版15 第2号墳玄室(上・下)	
図版16 第2号墳側壁(上)・第2号墳遺物出土状態(下)	
図版17 第2号墳遺物出土状態	
図版18 第2号墳奥壁	
図版19 第2号墳壁画	
図版20 第2号墳壁画	
図版21 第2号墳石室掘り方(上)・第2号墳墳端(下)	
図版22 第3号墳(上・下)	
図版23 第1号墳出土遺物	
図版24 第1号墳出土遺物	

図版25 第1号墳出土遺物・第2号墳出土遺物

図版26 第2号墳出土遺物

図版27 第1号墳出土中世遺物

第Ⅰ章 はじめに

1 調査に至る経過

大分県の最西部に位置する日田市は、地理的な条件から北部九州古代文化の影響を強く受け、散在する弥生～古墳時代の多くの遺跡にそれをみることができ、日田市に所在する4基の装飾古墳も、筑後川流域に点在する装飾古墳文化圏の一つとしてとらえられる。また大分県においては、横穴系を除いた壁画古墳が、一つの地域で四基所在するのは日田市だけであり、県下における装飾古墳分布の上で中心的な位置を占めると同時に、豊後の波及の門戸的な役割を果たしている。

こうしたことから、日田市の装飾古墳もはやくから注目され、昭和8年に穴観音古墳が国史跡となり、法恩寺山3号墳は昭和25年に賀川光夫氏によって確認され、その後本格的な調査を経て昭和34年に国史跡に指定された。またガランドヤ古墳も、1号・2号墳が昭和34年に県史跡に指定され、一応、日田市における装飾古墳は学術的価値の証明と、開発のための保護策が構じられた。そして壁画の保護についても、古墳の周辺に柵が設けられ、昭和47年には穴観音古墳に覆屋が設置された。

しかし実際には、石室の入口はほとんど開口した状態で、雨水の浸入や人の出入りも比較的自由であったために、石室内の温湿度の変化は激しく、壁画はカビ、コケ等に浸され消滅の一途をたどっているのが現状であった。特にガランドヤ古墳群においては、1・2号墳共に封土を完全に失っており、単に石室が露出するだけでなく、1号墳は前室の左壁が、2号墳は奥壁天井部付近が大きく開口しており、壁画保護の上からは全く無防備な状態であった。

一方、これに対し高松塚古墳の発見以来、装飾古墳の保護が大きな問題となり、福岡県や熊本県では、石室の完全密封、保護と公開を目的とした施設の設置などについて積極的にその問題に対応し、また研究がすすめられてきた。

こうした影響もあって、県内外の研究者や地元民から、特にガランドヤ古墳に対する保護が強く要望されるようになり、またこのままの状態では壁画は壊滅することが予想され、日田市教育委員会は県文化課と協議し、昭和59年度より遺跡保護のための基礎資料を得ることを目的とした、重要遺跡確認調査を実施することとなった。

2 調査の経過

調査は、1号・2号の両古墳を対象にし、昭和59・60年度の二年次にわたって実施した。

59年度調査（昭和59年9月25日～11月15日、同60年3月7日～3月22日）

〈1号墳〉前室、後室からなる複室墳で、前室側壁の一部が大きく開口しているために、内部は土砂がかなり堆積していた。従って調査は先ず石室内の土砂除去を行なったところ、床面は比較的攪乱の少ない状況で検出され、奥壁に平行する仕切石に赤と緑の二色による図柄が確認

され、また遺物も須恵器や武器類が多量に出土した。一方、古墳の北東側には墳丘規模確認のためのトレンチを設定したが、この地域は1m以上の埋土となっており、周溝等の確認はされなかった。

〈2号墳〉 単室の横穴式石室と思われるが、羨道部は土砂で埋まり、また玄室は奥壁側の天井部が大きく開口していたため、内部は多量の土砂が堆積していた。しかしそれが幸いしたのか、原位置で鉄刀が出土したのをはじめ、装身具、須恵器が出土した。壁面については、当初同心円文の存在が報告されていたが、現状では緑色のコケに覆われ、やっと肉眼で観察される程度であった。このため赤外線ビデオ及び写真撮影を行ったところ、奥壁のほぼ中央付近に弓を射る騎馬像と、その下部に横方向の複線の連続山形文を確認した。墳丘確認調査は、3本のトレンチを北東側と南東側に設定し、南東側トレンチでわずかな落ちこみを確認したが、これが周溝となり得るか判明しなかった。

60年度調査（昭和60年6月4日～7月22日）

〈1号墳〉 前室は前回3分の1ほどが未調査となっていたため、その部分の土砂を除去し、新たに須恵器が出土した。しかし羨道部は私道の下になって落盤の虞があるために調査を断念した。

一方、石室内の気温・湿度の変化状況調査のため60年3月に温湿度計を設置し、翌年3月まで観察した。

〈2号墳〉 石室内は崩壊の恐れがあったため鉄パイプによるサポートを行ない、前回未掘とした右側壁側の土砂を除去し、新たに馬具等が出土した。また、北西側にトレンチ（第1トレンチ）を設定したが、周溝等の確認はされなかった。

3 調査団の構成

59年度調査

調査団長 後藤英彦（日田市教育委員会教育長）

調査指導員 賀川光夫（別府大学教授）

小田富士雄（北九州市立考古博物館館長）

沢田正昭（奈良国立文化財研究所・埋蔵文化財センター遺物処理研究室長）

石山勲（福岡県教育庁北筑後教育事務所技術主査）

調査員 後藤宗俊（大分県教育庁文化課文化財専門員）

渋谷忠章（　　〃主任）

玉永光洋（　　〃　　〃）

小柳和宏（　　〃主事）

山田拓伸（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究員）

段上達雄（　　〃　　〃）

佐藤良二郎（宇佐市教育委員会技術師）

調査事務 岩沢光夫（日田市立博物館）

土居和幸（　　〃　　）

60年度調査

調査団長 後藤英彦（日田市教育委員会教育長）【昭和60年9月まで】

榆原芳彦（日田市教育委員会教育長）【昭和60年10月より】

調査指導員 日下八光（東京芸術大学名誉教授）

賀川光夫（別府大学教授）

小田富士雄（北九州市立考古博物館館長）

沢田正昭（奈良国立文化財研究所・埋蔵文化財センター遺物処理研究室長）

石山歎（福岡県立甘木歴史資料館副館長）

調査員 後藤宗俊（大分県教育厅文化課文化財専門員）

渋谷忠章（　　〃　　主査）

玉永光洋（　　〃　　主任）

小林昭彦（　　〃　　主事）

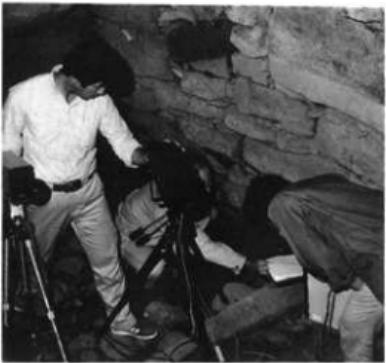
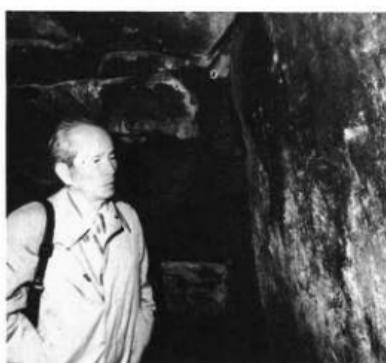
小柳和宏（　　〃　　〃　　）

山田拓伸（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究員）

調査事務 武石邦男（日田市立博物館館長）

土居和幸（　　〃　　嘱託）

（渋谷）



第2号墳
サポート

第2号墳
調査風景

森先生

日下先生

第2号墳壁画
赤外線ビデオ撮影

調査風景

第II章 遺跡の立地と環境

ガランドヤ古墳群は、大分県日田市石井町3丁目（大字石井字西ノ園）に所在する。

大分県の西端に位置する日田市は、日田郡、玖珠郡、下毛郡の4町1村に隣接し、西は福岡県との県境をなしている。市の中央部を東西に流れる筑後川は、九重山、阿蘇外輪山を源とする九州最大の河川で、その流域にあたる玖珠川、大山川は溶岩台地を深く浸蝕し、日田市で合流して三隈川となり筑紫平野を経て有明海にそいでいる。周囲には、北に兵滅鬼山、東に一尺八寸山、南に五条殿などの1,000m級の筑紫溶岩系の山々が連なっており、こうした山々を源とする大小の河川は山麓を縫うようにして三隈川に流れ込んでいる。こうした周囲の山々の内側には、耶馬溪溶岩や阿蘇溶岩による火山性台地が沖積地を中心に階段上に広がり日田盆地を形成している。沖積地は標高80～100mで、現在は市街地となっており所々に残丘がある。このように市全体の75%近くを台地や山林が占めているため交通の便が悪く、全ての道路は山麓の谷間に流れる河川に沿って放射状に走り市外に通じている。

ガランドヤ古墳群は、日田市南西部の三隈川が北に大きく蛇行する左岸段丘上の標高約80m上に位置する。古墳群は、すぐ北側の標高約100mの隈山と南側の阿蘇溶岩台地との凹地に立地しており、その西側は三隈川が急な流れへと変わり谷を形成している。周辺一帯は水田や畠地として利用されていたが、国道210号線の開通により古墳群の近辺には民家が立ち並び、隈山の北側は工業団地として整備されており環境は著しく変化している。ガランドヤ古墳の名称については、古くから1号墳の封土が流失して石室の一部に空間ができるまでいたのをみて、ガランと呼んでいたのがいつしか訛ってこのように呼ばれるようになったと言われている。

つぎに、ガランドヤ古墳群周辺の弥生時代の遺跡をみてみると、その大半は標高100m以上の台地上に分布しており、沖積地や微高地の遺跡は数ヶ所しか確認されていない。ガランドヤ古墳群の南側の長者原遺跡は、旧石器時代から古墳時代にいたる複合遺跡で後期の竪穴住居跡が確認されている。この長者原遺跡より北東約3kmに位置する吹上遺跡は、多数の土器、石器のほか竪穴住居跡、貯蔵穴、石棺、甕棺などが確認されている、前期後半から後期までの日田盆地を代表する大集落遺跡である。この吹上遺跡周辺の台地上には、草場第1、2遺跡、小迫原遺跡、宮ノ原遺跡、天神原遺跡などの、日田盆地の主要な弥生時代遺跡が集中している。これらの遺跡からは北部九州の影響を受けた土器や石器が出土しており、玖珠郡内の弥生時代遺跡とともに北部九州文化圏の東端となっている。

ガランドヤ古墳群をはじめとして市内の古墳は、横穴墓群を含み約30ヶ所が確認されているが、そのほとんどは河川流域の溶岩台地上やその崖面に位置している。ガランドヤ古墳群のように河岸段丘上に存在する古墳は天満1・2号墳、有田川流域の城山古墳、花月川流域の丸山古墳、三隈川左岸の護願寺1号墳の5基が確認されており、これらは散在して分布する。竪穴式石室を有し鉄剣や土師器が出土した姫塚古墳、細線式獸帶鏡が出土した日隈古墳、金銀錯嵌珠龍文鉄鏡が出土したと伝えられるダンワラ古墳などは、三隈川流域に存在する5世紀代の古墳

である。このほか5世紀代の古墳としては、有田川流域に存在する有田古墳があり、彷彿六獸鏡、珠文鏡、須恵器などが出土している。装飾古墳については、ガランドヤ古墳群を見下す長者原遺跡内に穴觀音古墳があり、玄室奥壁の同心円文のほか飛鳥、円文、舟、人物などが赤と緑の顔料で描かれている。法恩寺山第3号墳は、三隈川左岸の独立丘陵上に位置する7基からなる古墳群の1つで、赤と緑の顔料で同心円文や馬、騎馬人物などが描かれている。また、横穴墓群は、吹上、北友田、羽野、夕田、水木横穴墓群など三隈川より北側に密に分布している。



第1図 遺跡位置図 ($\frac{1}{50000}$)

- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. ガランドヤ1号墳 | 12. 上野姥塚古墳 | 23. 法恩寺山5号墳 | 34. 丸山古墳 |
| 2. ガランドヤ2号墳 | 13. 上野古墳 | 24. 法恩寺山6号墳 | 35. 夕田若宮古墳 |
| 3. ガランドヤ3号墳 | 14. 日隈古墳 | 25. 法恩寺山7号墳 | 36. 夕田横穴墓群 |
| 4. 津辻1号墳 | 15. 斎塚古墳 | 26. 佐寺原遺跡 | 37. 羽野横穴墓群 |
| 5. 津辻2号墳 | 16. 悅田塚古墳 | 27. 鳥羽塚古墳 | 38. 月隈横穴墓群 |
| 6. 穴觀音古墳 | 17. 千人塚古墳 | 28. 後山古墳 | 39. 吹上遺跡 |
| 7. 貯蔵古墳 | 18. 東寺横穴墓群 | 29. 薬師堂山古墳 | 40. 吹上横穴墓群 |
| 8. 長者原遺跡 | 19. 法恩寺山1号墳 | 30. 丸尾神社古墳 | 41. 北友田横穴墓群 |
| 9. 護願寺1号墳 | 20. 法恩寺山2号墳 | 31. 泉辺横穴墓群 | 42. 向原遺跡 |
| 10. 護願寺2号墳 | 21. 法恩寺山3号墳 | 32. 城内遺跡 | 43. 三郎丸古墳 |
| 11. 護願寺3号墳 | 22. 法恩寺山4号墳 | 33. 水木横穴墓群 | 44. 星隈横穴墓群 |

このように、日田盆地周辺の古墳の分布は、裝飾古墳にみられるような筑後川を媒体とする東西文化の伝播の要所であったことにより生じたものである。

令制下の日田郡には、「豊後國風土記」や「和名抄」によると、父連郷、在田郷、日理郷、夜開郷、石井郷の五郷が設定されていた。こうした5つの郷は、「古墳の分布が日田盆地の周辺に限られており、「この時代の有力な家父長的世帯共同体が、ほとんど盆地周辺に集中していた」とことが、設定の大きな条件となり、「盆地周辺の台地を分割」していくことにより第3回のような郷の設定がなされていると考えられてい

る。^註こうした郷の中でも、とりわけ父連郷と石井郷には古墳が多く分布しているが、父連郷の場合は沖積地を広く含む好立地条件がその要因とされ、石井郷においては、令制下に石井駅が置かれるなど交通上の要衝であったことによると考えられる。石井郷に置かれた駅馬は、現在の石井町に比定されており、ガランドヤ古墳群の周辺は、文字通り大宰府から豊後国府にいたる交通上、重要な役割りを果たしていた。

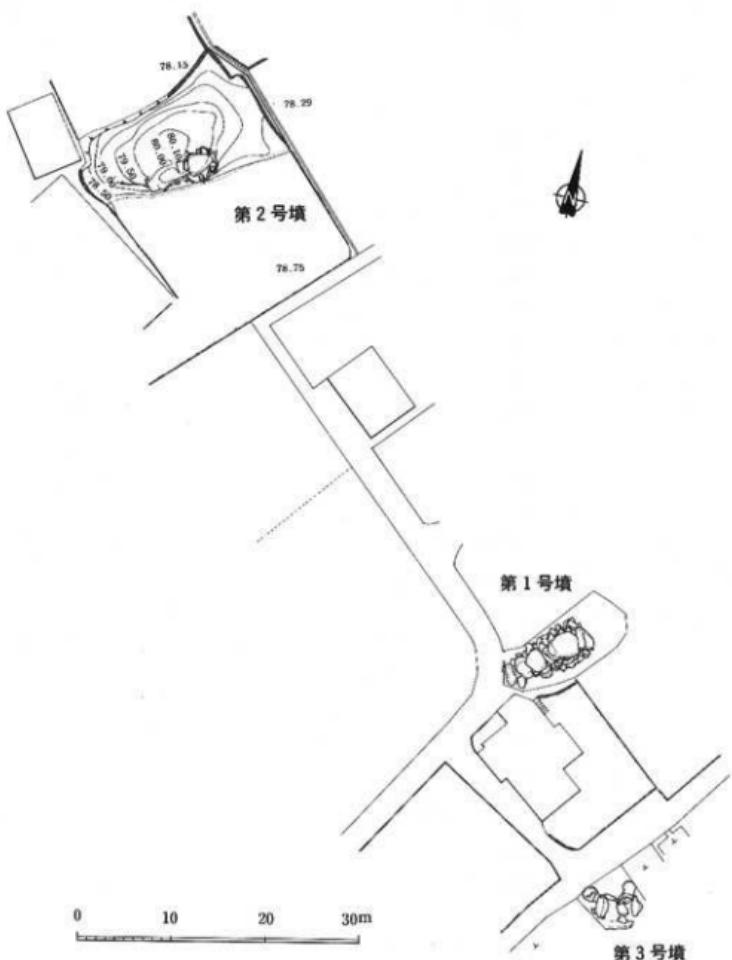
(土居)



第2図 周辺の地形 ($\frac{1}{5000}$)



第3図 日田盆地の古墳分布と郷の設定
〔大分県史〕より)



第4図 古墳位置図 ($\frac{1}{600}$)

註

後藤宗俊 「第2節 大和王權を在地首長」 「大分県史」古代篇 I 大分県 1982年

参考文献

「日田市40年史」 日田市 1983年

「九州天領の研究」 杉本勲編 1976年

「日本地名大辞典」44大分県 角川書店 1980年

第III章 調査の結果

1 第1号墳

(1) 現状及び周溝（第5図）

現在、1号墳周辺には民家が立ち並び、その姿は正面と背後よりかろうじて見ることができ。封土は完全に流出してしまい、天井石と側壁の一部が露出している。石室内は石の抜け落ち、石のひび割れなどが認められるものの、セメントによる一部補修により石組みは保たれている。しかしながら、封土の流出と石の抜け落ちによりわずかな隙間があき、雨漏りが生じてカビの発生と石の剥落の原因となっている。

羨道部は私道により天井部が壊され、前室から羨道部にかけての石組の一部分が抜け落ち不安定な状態にある。特に、前室左側壁の上部の石の抜け落ちは、長い間出入口として利用されていた。こうした石の抜け落ちによる隙間は、土砂の堆積とそこからさしこむ太陽光線により前室の一部にコケを発生させる要因となっている。

周溝については、古墳東側の空地に $1.5m \times 7m$ のトレンチを設定し掘り下げたが、盛土を行っているため、それを確認することは出来なかった。

なお、調査終了後、石室正面の私道に下水道埋設工事が行われ、立合いの結果、羨道部の側壁の下部が残存していることを確認した。
(土居)

(2) 主体部（第6図）

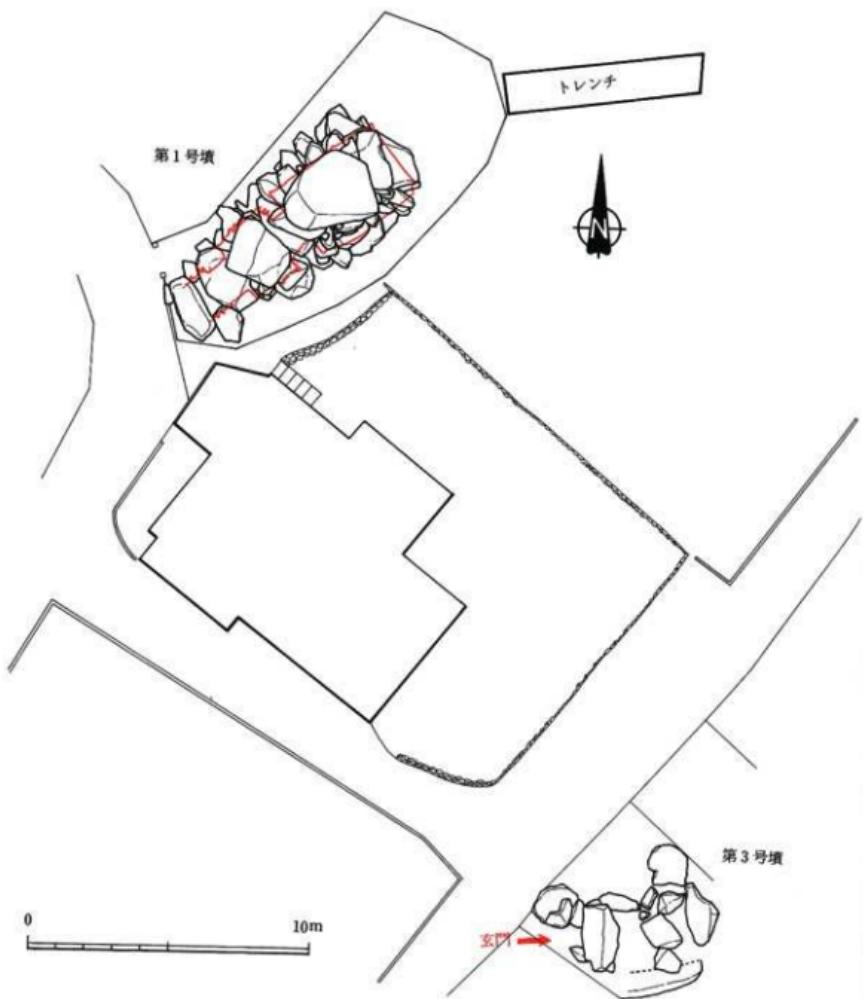
両袖複室の横穴式石室で、ほぼ南西に開口する。現状で羨道部が道路下にある他は比較的原状を留めている。玄室長 $4.3m$ 、前室長 $2.1m$ で、羨道部を除く石室全長は $6.9m$ を測る。まず平面プランと床面施設、そして上部構造の順に記述する。

玄室は $3.0m \times 4.3m$ のほぼ長方形であるが、右側壁は腰石の湾曲により若干の胴張り状を呈する。また、右袖石が左袖石に比べ約 $20cm$ 内部に張り出しており、左右相称とはなっていない。床面には径 $20\sim40cm$ の平らな河原石を敷き、更にその上に拳大の河原石を敷いているが、攢乱を受けており大きな河原石も無い部分がある。

奥壁から $1.3m$ の位置に奥壁と平行して板状の石が二石立てて置かれ（障石）、屍床を形成している。本来は、側壁に接する所まで連続して置かれていたものであろう。又、障石で区切られた屍床部分と同様に、左側壁に平行する幅約 $1m$ の床面の河原石が丁寧に敷かれている。この部分も屍床として用意されていた可能性が強い。

前室は約 $2.0m \times 2.4m$ の長方形を呈するものの、玄室に対して右側（東側）に僅かに振られており、また、玄門部の右袖石が内部に大きく張り出していることから、不整な形となっている。床面は、玄室同様 $20\sim30cm$ 大の河原石の上に拳大の石を敷いている。なお、玄室との間に幅約 $0.6m$ 、高さ約 $0.2m$ の仕切り石が置かれている。

羨道部は約 $0.5m$ 確認しただけであるが、幅 $1.5m$ で床面施設はない。前室との間には、幅約



第5図 第1号墳トレンチ配置図 ($\frac{1}{200}$)

0.5m、高さ約0.2mの框石が置かれる。

次に石室の構築についてである。玄室は奥壁に鏡石を、右側壁には二石、左側壁には三石の腰石を使用して基底部を造る。そして左右側壁とも、床面から約0.9mの高さで板状の石を積む



などして一度レヴェルを整えている。それより上部でも適宜板状の石を間に置きながら、厚さ0.2~0.5m、横幅0.4~1.7m程度の石を平積みしている。側壁の持ち送りは床面から1.5m程の高さからやや強くなる。奥壁は、表面を平坦に加工した高さ約2.3mの巨石を若干面を内傾させて据えており、その上部には二段に平積みした石を石棚状に突出させて一枚の天井石を支えている。ただし、二段の内の下部の石は割れており原型をとどめない。なお、天井までの高さは約3.3mを測る。

前室は、右側壁で腰石を一石立てて使用しているほか総て厚さ約0.2~0.7m、横幅約0.3~1.0mの石を持ち送りながら平積みにし、高さ約2.7mで一枚の天井石(二つに割れている)を支える。

閉塞施設(第7図)は框石のすぐ外側にあり、深さ約20cm程の落込みの中に20~30cm大の河原石や板状の石が乱雑に積まれていた。調査時には、その掘り込の底からほぼ四段、約60cmが残存していた。

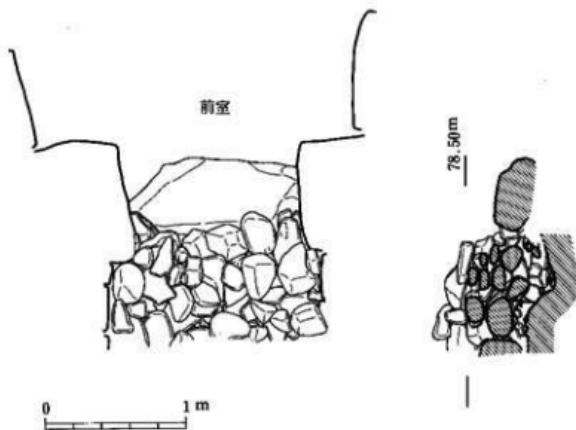
(小柳)

(3) 壁画(第8図)

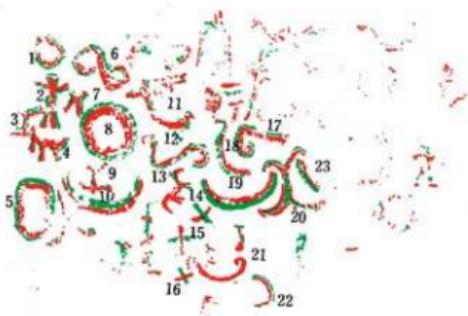
奥壁のほぼ全面と障石に彩色壁画が認められる。奥壁に描かれた範囲は中央で床面から0.3mの位置から2.0mの高さまでであり、両側に行くほど下まで描かれていらない。使用された色は“くらいあかみのブラウン”(以下の記述では単に赤と言う)と“くらいみどり”(同じく緑と言う)の二種であり、一部を除いて両者の併用により描いている。また、顔料分析により白色粘土の存在も指摘されているが、それが本格的なものかどうかは今後の調査を待ちたい。(40ページ参照)

奥壁壁画は、右側約3分の1と中央上部が石の表面が剥離しているため消滅状態であり、文様が全く不明である。そこでここでは良好な部分の文様について個別に取り上げ、本来どのような文様が描かれていたのかを中心に記述していきたい。

1は一見円形に見えるが、上部でつながらずに僅かに開く。赤の回りを緑で囲む。2は両手を広げて足を開いて立つ人物としてよい。赤で人物を形造り、緑で頭、両手の下側、胴体、足の外側に縁どりをする。3は9と同形である。“工”的字に見えるが、上の線は上方に湾曲して



第7図 第1号墳閉塞施設 (1/40)



第8図 第1号墳壁画番号図 (1/30)

いる。赤で描いた後、上の線の上側、縫の線の両側、下の線の上側に緑で縁どりをする。4は動物の側面観である。頭部の所で3の文様と重なり見にくいか、やはり赤で形を描いた後縁で主に下側を縁どりする。背部に赤の盛り上がりがみられ、鞍を表現したものだとするとこの動物は馬になろうか。5は継長の梢円形の様であるが右下がはっきりしない。上の左右はやや角

があるように描かれているのに対し、下側は丸く表現されている。赤の回りを緑で囲む。6は“8”の字を横にしたような文様である。これも円形部分の大きさからみて赤が先に描かれたと見て良い。7は“X”字状の文様で、外側に縫の縁どりがみられる。8は円文である。中心部が剥落しているが、同心円文にはならないようである。やはり、赤の回りを緑で囲っている。9は3と同じ。10は19と対になる。舟を描いたとみられる。しかし10が上を緑、下を赤で描くのに対し、19はその逆になっている。11は鳥の側面であろう。尾の部分が上の文様とつながり上まで延びるのかどうかであるが、縫の使い方からみてつながらないと見た方がよいであろう。また、下側に剥落部分があり全形は不明であるが、赤で形どり部分的に縫を使用している。12は両端が鍵手状に曲がる文様である。形状からして赤で先に描いたと思われる。13は4足の動物であるが、4と違い4本の足や耳を描いており写実的である。また、水平にではなく右斜め上に向かって描かれている。基本的には赤で描いているが、馬のたてがみにあたる部分と前足の一本が縫で描かれておりアクセントとなっている。14～16は何れも“十”字状に描かれている。しかし、横棒が赤か縫棒が赤か、そして赤、縫の先後関係をみると三者とも異なる。飛鳥とされるものである。17は12と18を挟んで対に見える。しかし右側がはっきりしない。赤の外側を縫で縁どる。18は上側が鍵手状に曲がり、下側で湾曲する。19は先述した。20は“X”字状で端部が大きく湾曲する。波を表現したものであろうか。赤と縫は巧みに使い分けており、下側約3分の2は縫の両側を赤で囲み、それより上は上側のみ縫で縁どっている。21は確認できる範囲では唯一赤のみ使用して描いている。両側が鍵手状に湾曲する。22は半円形を描く。23は19と20を挟んで対になると思われ、右側が消滅しているものの19と同形になろう。以上が比較的残りが良く、原型を伺い知ることのできるものである。

障石には二石とも、赤と縫の縦じま模様に見えるものが描かれている。しかし向かって右側

のものは赤が下部で続いているが、何を表現しようとしたかは不明である。

(小柳)

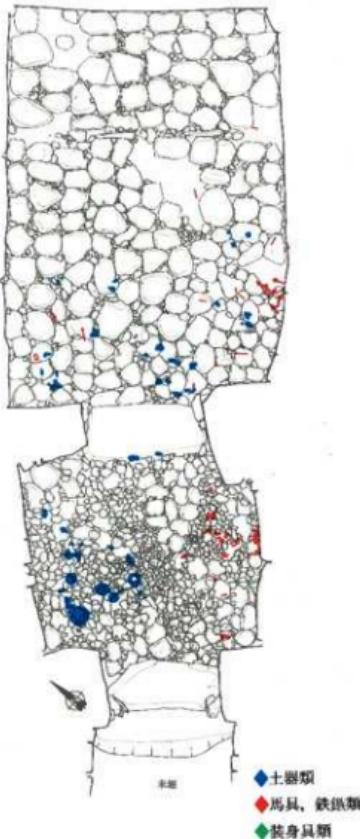
(4) 遺物 (第9図)

当初、既に早くから開口していたことから石室内の攪乱が予想されていたが、前室は殆ど乱されていなかった。しかし、玄室は床面に敷かれた大きな河原石も取り去られている部分もあり、攪乱を受けている。

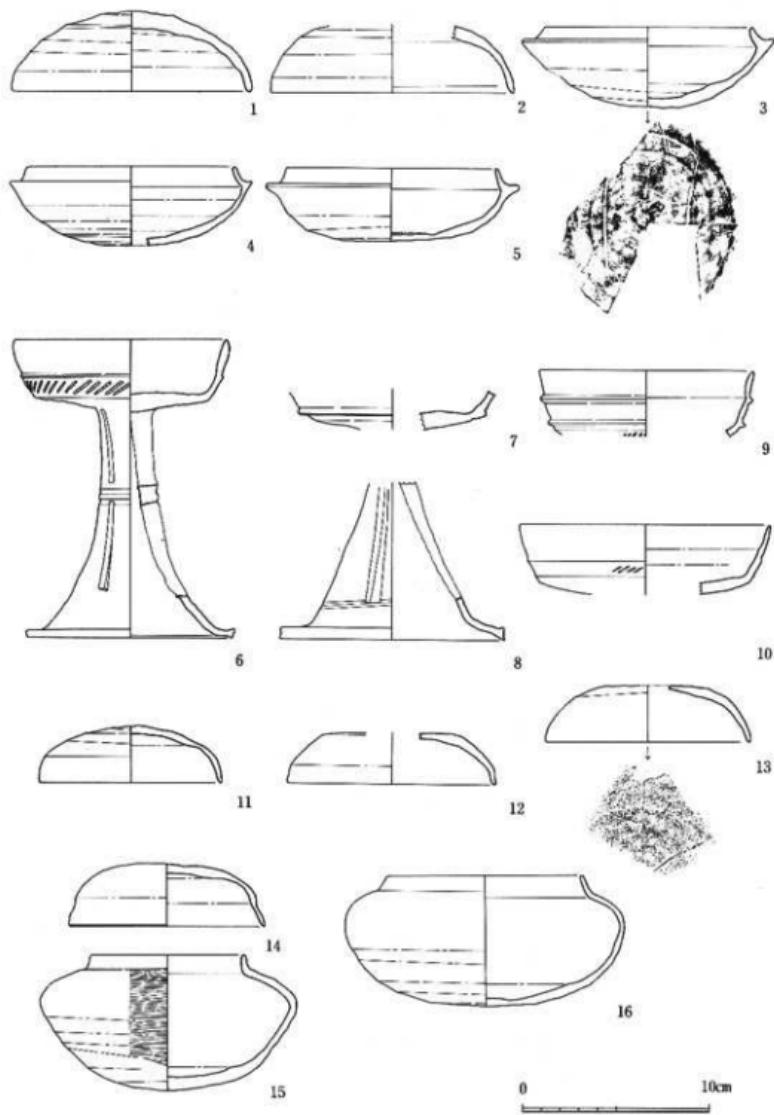
出土遺物には、須恵器・土師器・馬具・鉄鎌・耳環・玉類がある。この内、ほぼ原位置または原位置に近いと思われるものは鉄鎌と須恵器の一部、そして馬具である。鉄鎌は、前室からは一本も出土していない。特に玄室の右側壁ぎわに多く見られた。須恵器は、完形品が前室の左半分から出土しているが、床面に接したものは少なく、何れも10~15cm程度浮いていた。また、同様に径20~30cm程度の河原石が見られ、須恵器と共に移動したものと考えられた。馬具は前室右側壁際によつて見られ、玄室のものは前室から移動したものであろう。

土器 (第10、11図 第3表)

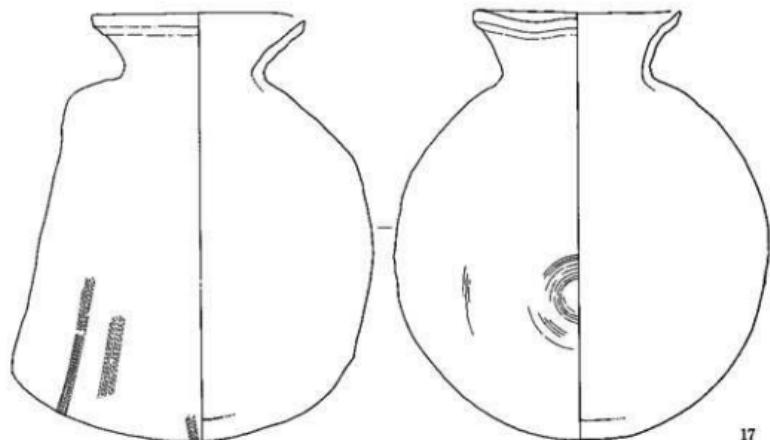
1、2は环蓋。3~5は环身。3に|||のヘラ記号が底部に描かれている。蓋は径12.6cmと13.0cm、身は径11.0cmと11.2cmで端部は何れも丸く收まる。6~10は無蓋高坏。7と8は同一個体。6と8は長脚二段透かし。坏部には何れも二条の突帯を巡らし、その間に斜めに刺突文を有する。11~13は増蓋。13には×のヘラ記号が内面に見られる。14、15の壇と壇の蓋は自然軸の状態からセットしてよい。肩が張り、やや偏平のものである。16も壇。15に比べて体部に丸みを持ち、口縁部が内傾する。17、19は提瓶であるが、17には把手がない。18は聴。頸部がしまり口縁部が大きく開く。20は台付きの壺類の脚部。



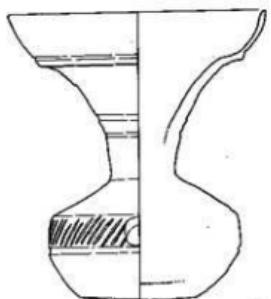
第9図 第1号墳遺物出土状態 (1/60)



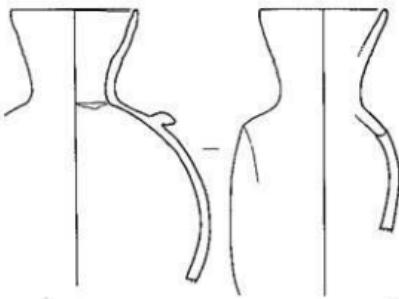
第10図 第1号墳出土土器(1) (1/3)



17



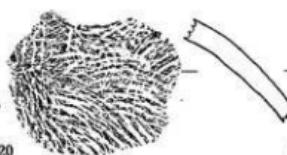
18



19



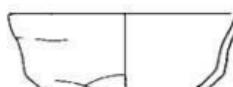
20



21



22



23

0

10cm

第11図 第1号墳出土土器(2) ($\frac{1}{3}$)

三角形と思われる透かしを持つ。21は脣部破片。22、23は土師器。22は長く延びる直立する口縁部を持つ壺。23は高杯の壺部であろう。

以上の土器群は須恵器壺蓋の特徴からIII b期でも新しいところに位置付けられよう。(小柳)馬具(第12~16図)

1号墳前室より、ほぼ完形に近い轡2対分をはじめとして、雲珠・鞍・鏡金具の一部や節金具などが出土している。これら馬具については、破損や腐蝕が著しいため、掲載は主要なものだけにとどめた。

1・2とも鉄製の轡である。1の引手は全長15.6cmの一本の鉄棒を握り、両端に環をとりつけている。一方の環先は外側に開き、一方は二連衡の環先に連結されている。衡一連の長さは8.7cmを測る。鏡板は環状の楕円形を呈し、衡の環先に引手より外側に連結されている。鏡板の立闇中には、平・断面が直方形を呈する孔がある。鏡板は巾7.1cm、長さ5.1cmを測る。2の引手は一本の鉄棒をそのまま利用し、長さは14.4cmと1の引手に比べ短い。1と同様、二連衡の環先の一方に連結されている。衡一連の長さは7.9cmである。鏡板は環状の楕円形を呈し、推定巾6.4cm、長さ5.1cmを測る。立闇中には長方形の孔があり、衡先の環に引手より外側に来るよう連結されている。

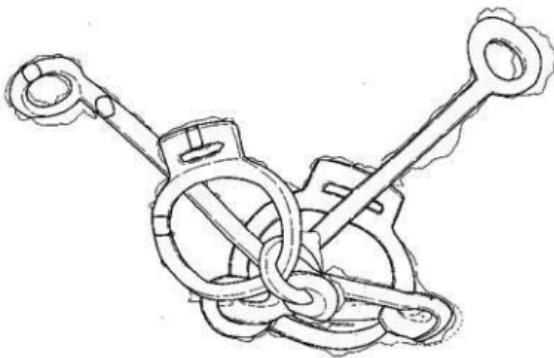
3~6は鉸具である。3は0.5cmの鉄棒で輪金を作っており、指金の先端部の一部を欠く。4は3と同様の形態と考えられる。3・4ともに鏡に伴う鉸具である。5は楕円形を呈し、長さ8.8cm、推定巾5.7cmを測る。6は隅丸長方形を呈し、長さ7.1cm、巾3.9cmを測る。5・6とも指金の一部を残す。

7は変形が著しいものの、上部はU字状を呈する。上部は径0.7cmの円形を、下部は断面長方形の板状をなす。8は上部が径0.6cmの環状のU字状を呈する。下部は推定巾1.7cm、厚さ0.4cmの断面長方形の板状をなす。9は先端部が不定形で、断面は長方形の板状をなす。10は先端部が尖がり、断面は長方形の板状をなす。11は巾1.2cm、厚さ0.3cmの断面が長方形の板状をなす。7~11は銅留金具を残す。7・8は鏡の上部金具で、9・10はその先端に、11はその中間部分に相当する。

12・13とも上部がJ字状を呈し、先端部が一部欠損している。下部は断面長方形の板状をなしており、銅留金具を有する。14は上部がU字状の断面長方形を呈し、上部付近は巾0.6cmと厚みをもつ。銅留金具を有する。12~14はどの部分に属するのかは不明である。

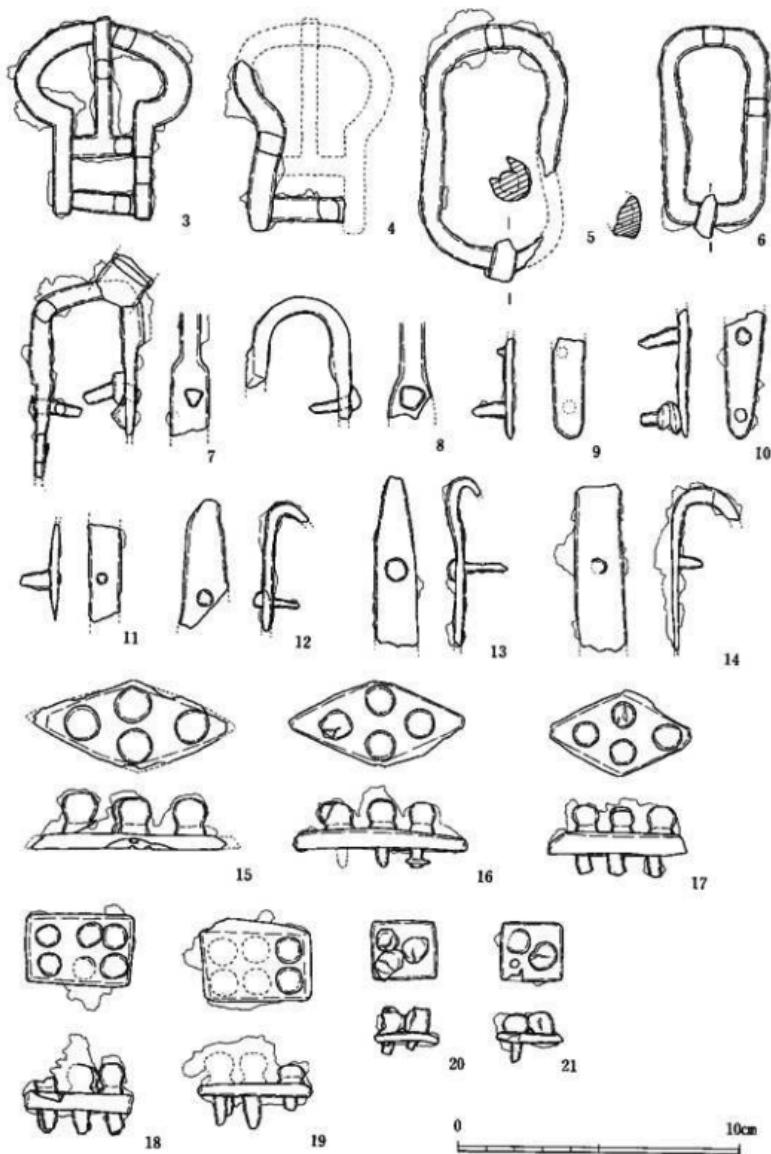
15~21は節金具で、3種類6個体ある。15~17は板状の菱形を呈し、球状の節紙が4個とりつけられている。17は15・16に比べ小形で厚みをもつ。18・19は2.5cm×3.8cmの板状の長方形を呈し、6個の節紙がとりつけられている。20・21は一辺約2cmの板状の正方形を呈する。それぞれ、3個の節紙がとりつけられている。15~21は鉄地金張りである。

22は、径4.5cm、厚さ1.5cmを測る円形の座金具に、銅金具により鉸具がとりつけられている継である。鉸具は径0.6cmの鉄で輪金を作りだしている。23~24は、その形態より軽に伴う鉸具と考えられる。0.5cm前後の鉄で輪金を作りだしており、銅金具を残す。25は円形の座金具で、

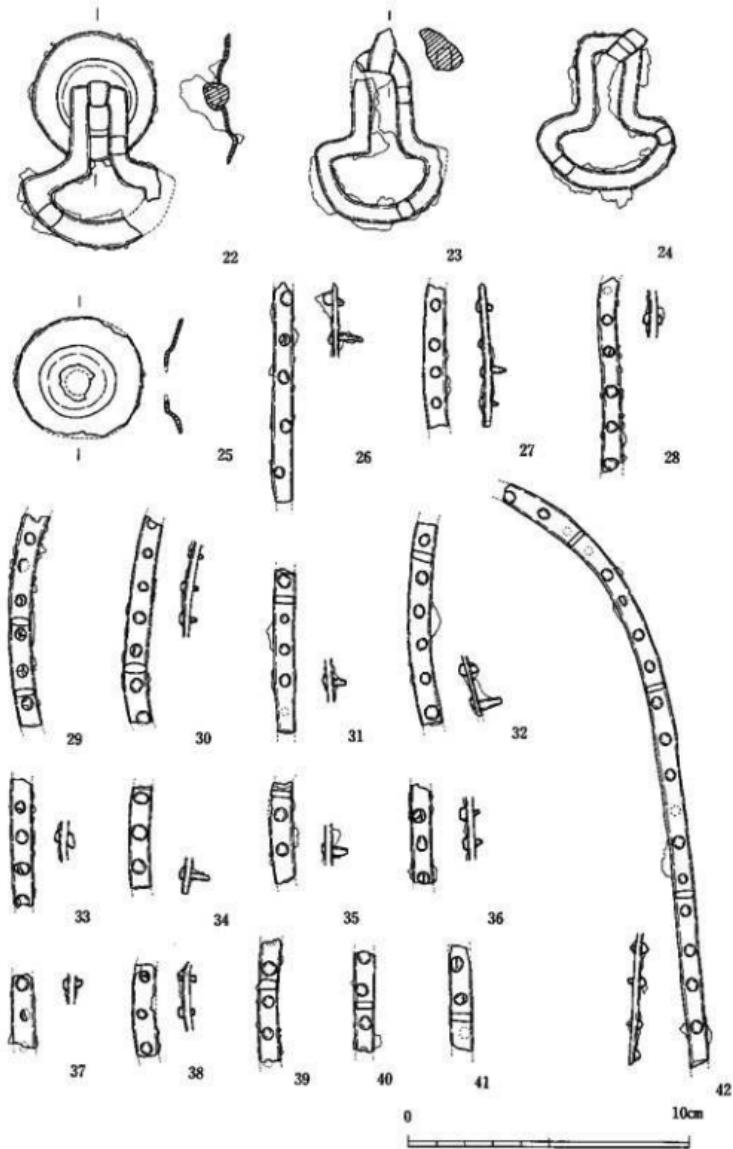


0 10cm

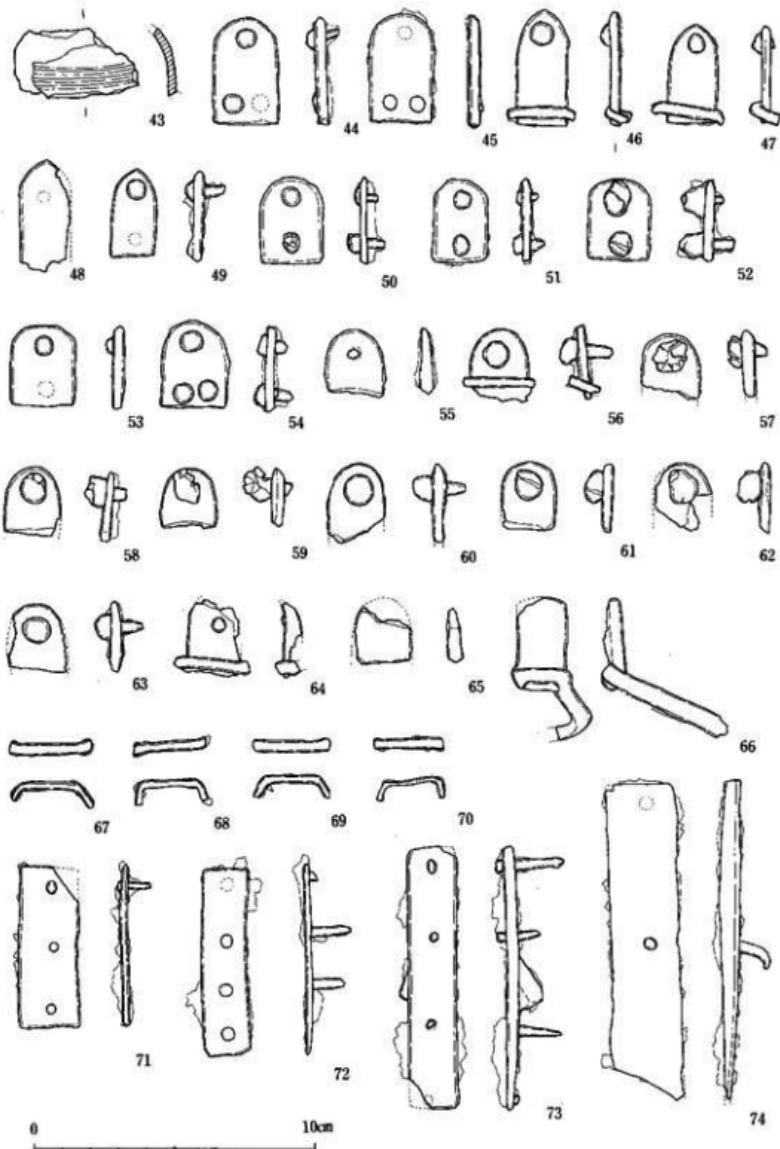
第12図 第1号墳出土馬具(1) ($\frac{1}{2}$)



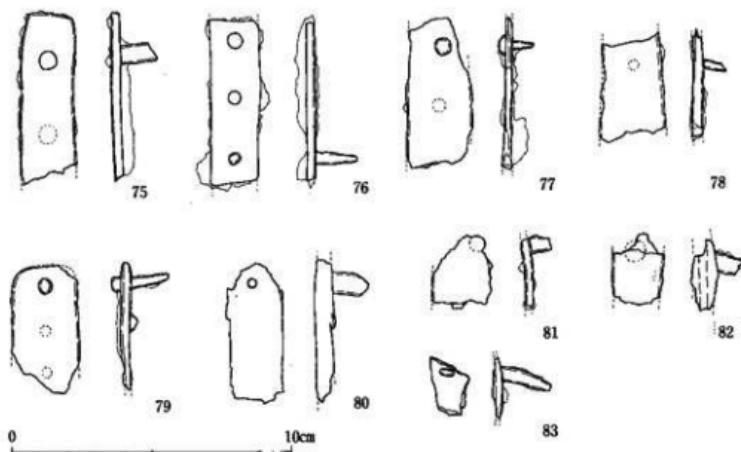
第13図 第1号墳出土馬具(2) ($\frac{1}{2}$)



第14図 第1号墳出土馬具(3) ($\frac{1}{2}$)



第15図 第1号墳出土馬具(4) ($\frac{1}{2}$)



第16図 第1号墳出土馬具(5) ($\frac{1}{2}$)

鉢金具、鉤金具は欠損している。径4.5cm、厚さ1.5cmを測る。

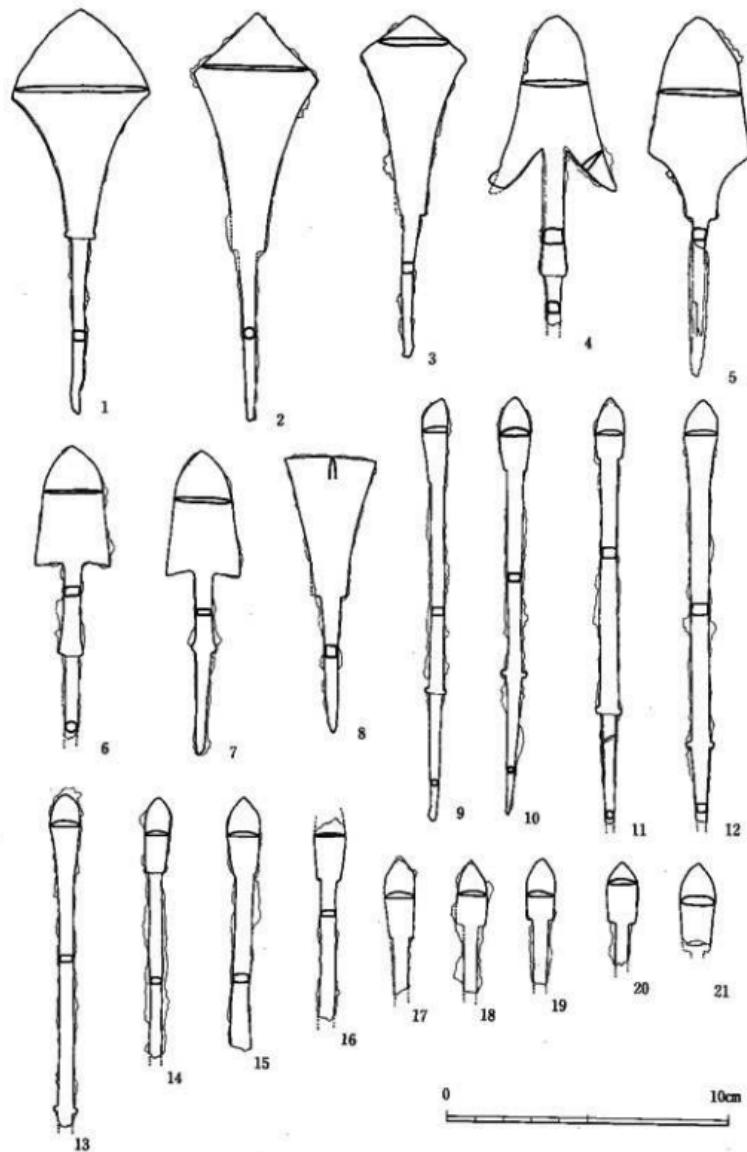
26~42は鞍橋の縁金具である。巾0.8cm、厚さ0.2cmを測る。上面には1cmほどの間隔で0.2cm程度の孔があり、青銅製釘が残存する。釘の頭の径は0.4cm前後で、釘の長さは完形で1.2cm、径は0.2cmほどである。縁金具裏面と釘の一部に木質が残っている。欠損しているため全体の形状把握はできない。

43は鉄地金銅張りの雲珠の一部で、中央体部の下端に3本の凹線をもつ。中央体部は半球形をなしていたものと考えられ、径は推定で8cm前後である。

44~65は雲珠もしくは辻金具の脚と考えられ、形態により5種に分けられるがどちらに付属するかは分らない。44~45は、長さ3.8cm以上、巾2.3cm、厚さ3.5cmを測る。先端は丸みを帯び、0.2cmの孔を3個有する。鉄地金銅張りで、留金具を残す。46~49は、先端が尖がり、他の脚に比べ細みである。46~48は、長さ3.5cm~4.0cm、巾1.7cm~1.8cm、厚さ3cmを測る。46~47は、巾0.4cm、厚さ0.2cmの貴金属と留金具の一部を残す。49はやや小形で、径0.4cmの留金具を残す。50~53は、先端が隅丸方形をなし、2個の孔を有する。長さ2.9cm、巾2.0cmないし2.2cmを測る。54は、先端が丸く、孔を3個有する。55~65は、先端が丸く、巾0.2cm、厚さ0.3cm前後の留金具を有する。46~49は鉄地金銅張りである。

66は環状の鉄製金具に長方形(?)の金具をとりつけたものである。馬具の類に含めるべきでないかも知れない。

67~70は貴金属である。巾0.4cm、厚さ0.2cmを測り、両端は曲げられている。雲珠もしくは辻金具の脚上に取り付けられたものであろう。



第17図 第1号墳出土鐵鏃 (1/2)

71~83は、鉄製の板状のものに鉄製の釘を取りつけたものである。71・72は、板上に等間隔で3ないし4個の孔をもつ。73~80は、欠損はしているものの、71・72と同様のものと考えられる。特に、74は、巾2.5cm、厚さ0.5cmを測る大きなものである。81~83は、欠損が著しいどの部分に属するのかは不明である。

(土居)

鉄錐 (第17図)

1、2、4、6、7、8、10が玄室右

側壁際でまとめて出土した。1~3は圭頭斧箭式、4~7は三角形式で4は逆刺を有す脇挿式。8は方頭斧箭式で、9は棘蓖被片闊片刃箭式。10~21は片丸造鑿箭式で12、13は闊無である。蓖被部の残存するものは総て棘蓖被である。

(小柳)

弓付属金具 (第18図1~4)

いわゆる弓付属金具と呼ばれるもので、計4点出土している。長さは全形が伺い知れるものでは3.4~3.7cmを測り、両端には円環状の突起を有する。

(小柳)

不明鉄器 (第18図5)

幅2.2~2.5cmを測る扁平な断面を有す鉄器で、あるいは馬具の一部かもしれない。(小柳)

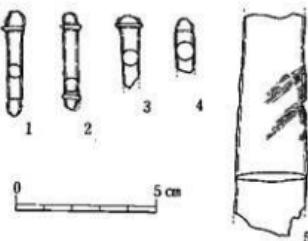
装身具 (第19図)

1~8はガラス製の小玉である。1・2は径が0.2cm以下と他に比べ小さい。9は径約0.1cmのガラス製の丸玉である。10~12は碧玉製の管玉で、10は一部欠損している。孔径は0.3cmで、片側穿孔である。13~17は銅胎に金箱をおいた金環である。13は突き合わせ部が狭く、14は縫長である。18・19は銀環で、2点とも断面径0.4cmを測る。18は遺存状態が良好である。(土居)

その他の出土遺物 (第20図)

前述したように調査前には前室で約1.4m、玄室でも平均15cmの土砂の堆積があった。その埋土の中から、中世・近世の遺物が出土した。特に羨道部から前室にかけて上層からは近世、中層からは中世の遺物が出土している。このため、中世遺物の示す時期が第1号墳の開口時期をある程度示すものとする事ができよう。なお、近世遺物は小破片であり図示できない。

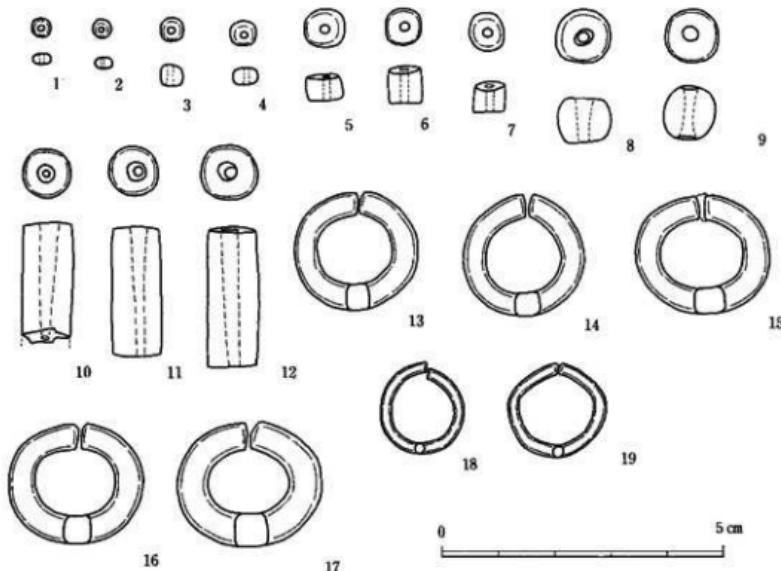
1~5は総て体部外面に縞蓮弁を有する青磁碗。底部まで残る1は、高台断面は方形で、底部は厚い。高台部脣付及び内部は露胎。6は無文の白磁碗。7は口禿げの白磁皿。底部まで施釉。8~11は青磁皿。8、9は見込みに櫛目による文様が施される。8は底部の釉をカキ取っている。9、10は体部下位まで施される。12~14は土師器。何れも底部は糸切り。13は板目模を有す。14は口縁部にすが付着している。15は瓦質土器の湯釜。肩部に花文と巴のスタンプ文が見られる。黄褐色を呈し、土師質に近い。



第18図 第1号墳出土鐵器 ($\frac{1}{2}$)

以上の上器の所属時期は、青白磁類がほぼ同時期で13世紀代、12は13世紀、13は13~14世紀、14は15~16世紀、15は15~16世紀である。青白磁類は出土状態からも一時期に一括して投げ込まれたと考えられる。

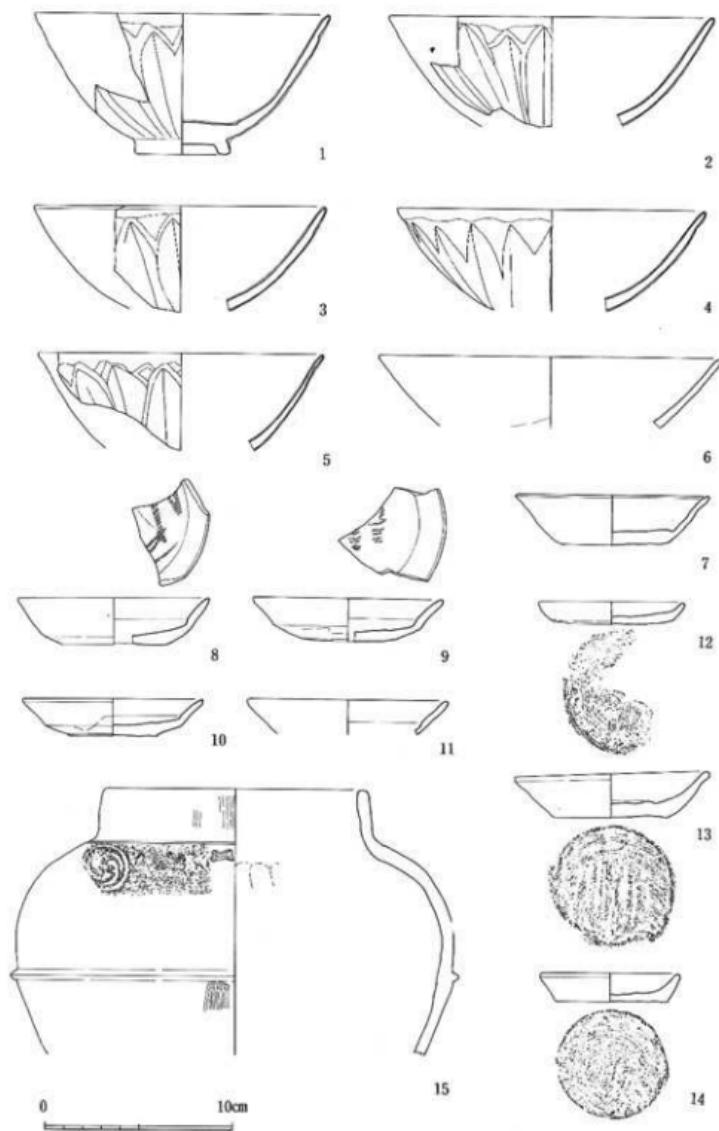
(小柳)



第19図 第1号墳出土装身具 ($\frac{1}{1}$)

第1表 第1号墳出土玉類観察表

	径 (mm)	孔 径 (mm)	厚さ	色 調
1	1.8×1.9	1.5×1.4	1.8	グリーン
2	1.6×2.0	0.6×0.5	2.0	イエロー
3	3.4×3.5	1.1×1.4	2.9	スカイブルー
4	4.6×3.1	1.1×1.1	3.8	ライトコバルトブルー
5	6.0×6.0	0.9×1.2	3.9	コバルトブルー
6	5.5×5.6	1.2×1.0	6.7	〃
7	5.0×5.4	1.1×1.0	5.4	ダークコバルトブルー
8	9.6×9.6	2.6×3.0	9.1	グリーン
9	7.0×6.6	3.1×2.0	8.6	ダークグリーン
10	8.9×(8.7)	3.2×(1.2)	(21.2)	黒緑色
11	7.8×8.9	3.2×1.8	23.0	〃
12	8.5×8.9	3.6×2.1	24.9	〃

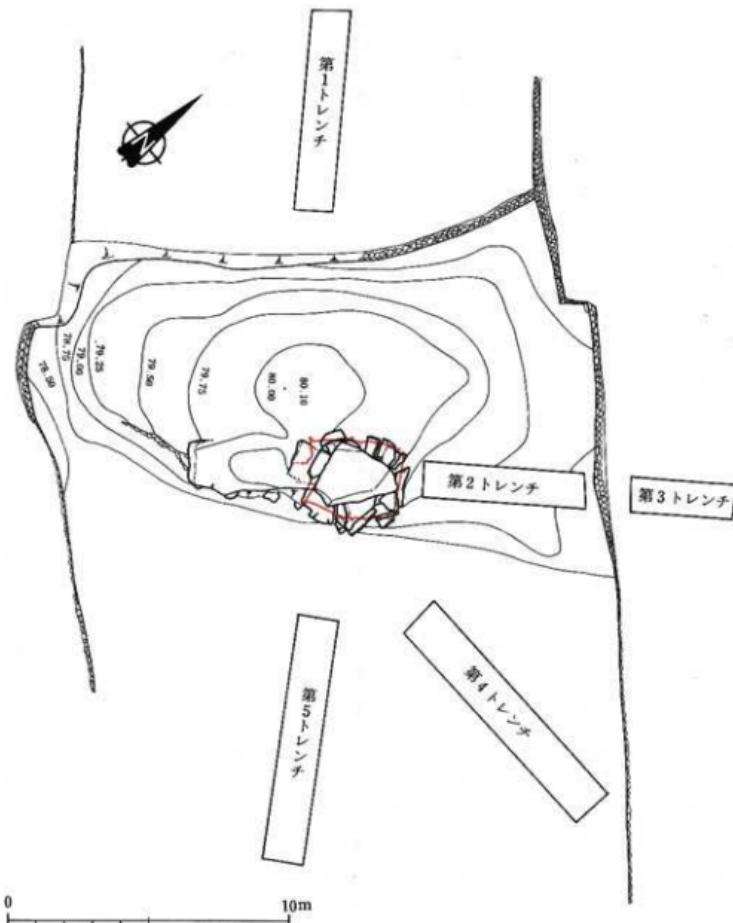


第20図 第1号墳出土中世遺物 (1/3)

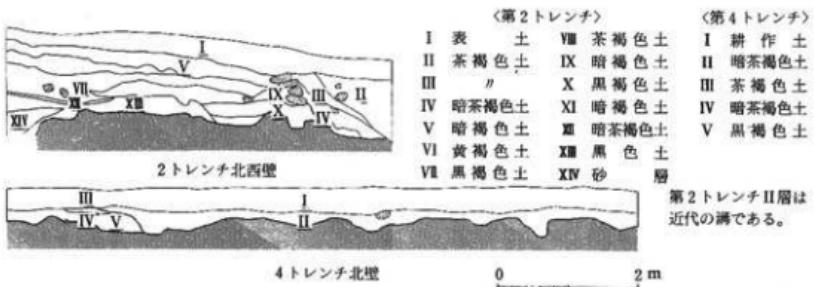
2 第2号墳

(1) 現状と壇丘

2号墳は、1号墳の北西約60mにあり、封土の西側半分を失い現状で約20m×9mを残すのみとなっている。そのため、石室右半分は露出してしまい、石組みの石は抜け落ちがひどく、



第21図 第2号墳トレンチ配置図 ($\frac{1}{200}$)



第22図 第2号墳トレンチ断面図 (1/80)

奥壁部分にできた大きな空間は人の出入りを自由にしている。天井石は、封土がなくなり石が抜け落ちているため、両側壁の数枚の石にかろうじて支えられており非常に危険な状態にある。

また、調査前の石室内は流れこんだ土砂が1mほど堆積していて、羨道部においては完全に埋没してしまっている。石室内には雨漏りや太陽光線などによりカビやコケが発生し、特に奥壁のカビやコケは岡柄の確認を困難にしている。

2号墳の周溝を確認するため、南側の工場となっている部々を除く位置に、5本のトレンチを設定した。1、3、5トレンチは、現在畠地となっている部分に設定して掘り下げたが、周溝は確認することが出来なかった。玄室奥壁の北側に設定した2トレンチでは、石室の掘り方、墳丘の裾部、周溝の一部を確認した。4トレンチでは、幅70cmほどの周溝と墳丘の裾部を確認したが、畠地耕作により盛土のほとんどは削平されている。

2、4トレンチにおいて確認出来た墳丘の裾部により墳丘の規模を推定してみると、2トレンチの墳丘裾部は石室の中心から約4.2mを、4トレンチの墳丘裾部は石室の中心から約3.8mをそれぞれ測ることより、径8m前後の円墳であったと考えられる。
(土居)

(2) 主体部 (第23図)

ほぼ南西に開口する両袖の横穴式石室である。奥壁上部と右側壁上部の石が抜け落ちており、そこから立ち入りが出来る状態であった。諸般の事情で玄室の調査にとどまったため、前室の有無は不明である。現在墳丘の東半分が流失しているので、玄室および羨道部石組みのはば半分が露出している状態であるが、外見では前室を思わせる大きな張りだしは認められない。前室が存在したとしても小規模なものであろう。まず平面プランと床面施設、そして上部構造の順に記述する。

玄室は胴張りプランを呈するため玄室幅は中央付近の最大値で2.8m、奥壁部分で2.4m、袖石部分で2.2mを測る。玄室長は大部分で3.3mである。また、右袖石に比べ約30cm内部に張り出しており、左右相称とはなっていない。床面にはほぼ中央付近に奥壁と平行して板状の石を並べ、障石とする。障石と奥壁に挟まれた部分には2.4×2.7mの板状の大きな石を一枚と小

さな河原石および板状の石を敷き、段状を呈する屍床としている。屍床の南側は約10~15cm低くなっている。そこには径20~40cmの平らな河原石を敷き、更にその上に拳大の河原石を敷いている。また、部分的には拳大の石の上に更に人頭大の河原石を乗せるところもあり、追葬に伴う物であろうと推測される。

次に石室の構築についてである。玄室は奥壁に鏡石を、右側壁には三石、左側壁にも三石の腰石を使用して胴張りプランの基底部を造る。そして左右側壁とも、随時板状の石を積むなどしてレヴェルを整えて、厚さ0.2~0.5m、横幅0.4~1.3m程度の石を持ち送りながら平積みしている。持ち送りは1号墳よりきつく、更に1号墳が床面から約1.9mの高さからきつくなるのに対して、2号墳は腰石から始まる。そして3.0mの高さで一枚の天井石を支えている。鏡石には、屍床床面から2.4mの高さの、表面を平坦に加工した巨石を使用しているが、天井石との間の石は抜け落ちており、この部分がどのように積まれていたかは分からぬ。(小柳)

(3) 壁画

石室はほぼ全面に赤彩を施しており、奥壁も全面(ただし上部は風化のため殆ど消えている)に赤彩が見られる。その中で壁画は奥壁のみに認められ、赤彩の上に重ねて線で文様を描いている。文様は既に消滅している部分が多いと思われるが、同心円文、馬上で弓を引く人物、そして複線の連続山形文を現在明確に認めることができる。

同心円文は以前賀川光夫氏らが既にその存在を指摘していたところであるが、今回の調査に於ては右側中位に一個確認された。

馬上で弓を引く人物は今回新たに確認されたものである。左側面で尾を上に上げた全長約18cmの馬の上に両手を大きく広げて弓を引く人物(ただし頭部は明確でない)が乗っている。馬の顔の前面に鍵手状の文様があるが何を表現したかは不明である。

複線の連続山形文は奥壁のほぼ中位に描かれており、中央部はやや不鮮明であるが、復元すると8個の山を数えることが出来る。しかし、右側の2ヶ所はその下部に線が引かれ、三角文となっている。更にその下に何等かの文様が描かれるが、消滅した部分が多く全形は不明である。

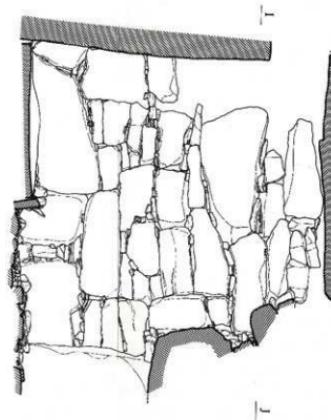
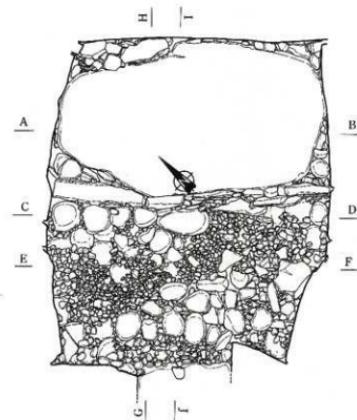
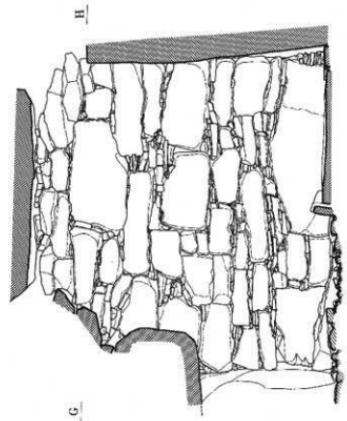
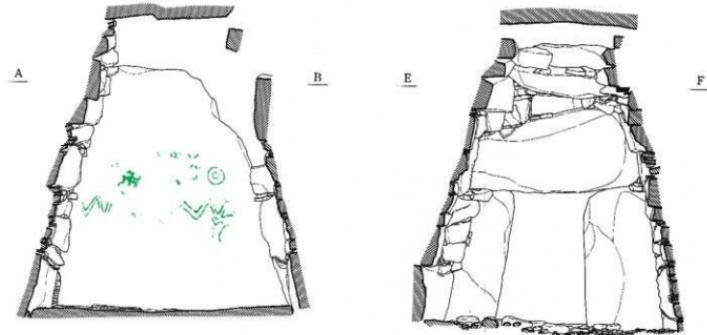
その他にも、特に山形文より上部に何等かの文様が描かれた痕跡が認められるが、消失が激しく復元するのは困難である。(小柳)

(4) 遺物(第24図)

屍床上から鏡、直刀、鉄鎌、耳環、ガラス製丸玉、同小玉、滑石製白玉が出土した。その内全く原位置を動いていないのは直刀である。直刀は刃先を北西方面に向け、刃部を上にして奥壁に平行に置かれていた。そしてそれと奥壁の間にガラス製の玉類が集中して出土し、被葬者がこの位置に頭位を南東方向に取り安置されたことがわかる。鏡は、右側壁際で床面から10数cm浮いて鏡面を上に向け、又、耳環は二個連結した状態で、頭部付近においてやや浮いた状態で出土した。滑石製白玉は一個のみ屍床上中央より左側(西側)で検出した。

屍床以外では須恵器、馬具、鉄鎌、耳環、鎌、鑿が出土している。須恵器は玄門部の仕切り

水系レベルは C-D は 78.0m
他は 80.0m である。



第23図 第2号墳石室実測図 ($\frac{1}{40}$)



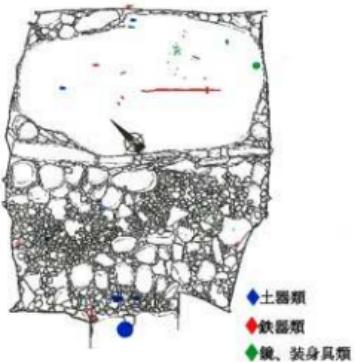
石上にやや浮いて平瓶の完形品が出土したほかは、總て小破片である。蓋も玄門付近で出土した。また、鐵鎌の一部や鉈等はその上に河原石が乗っており、玄門近くに見られる20~40cm大の河原石は追葬に伴って敷かれたものである可能性が大きい。

(小柳)

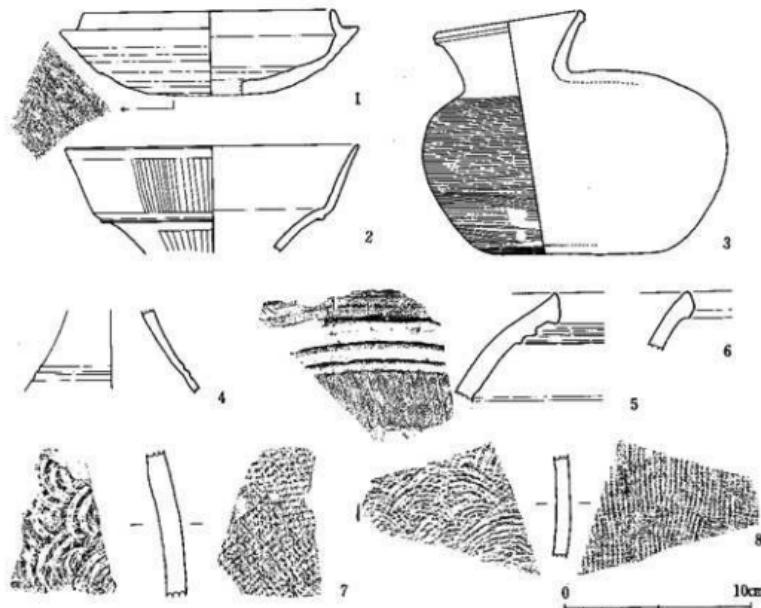
土器 (第25図 第4表)

原位置と思われる部分から出土したものはない。1の壺は復元口径13.0cmで口唇部は丸く取まる。2の甕は口縁下に明瞭な突帯が巡る。3の平瓶は唯一の完形品である。4は高壺で透かしはない。5、6は甕の口縁である。7、8は甕の胸部。

5がやや古い様相を呈する他はおおむね



第24図 第2号遺物出土状態 ($\frac{1}{60}$)



第25図 第2号墳出土土器 ($\frac{1}{3}$)

III b期に位置付けられる。

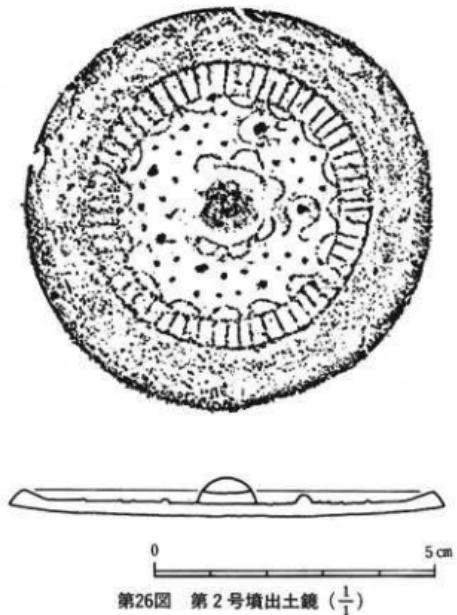
(小柳)

鏡 (第26図)

面径7.5～7.7mmを測り、やや梢円形を呈する。反りは2.0mmである。鏡質は全体に鋸びが出ているものの、その鋸を落とした部分では小豆色の比較的良好な銅質であることがわかる。また、一部鋳出しの悪さから文様の不鮮明な部分がある。鏡背文様は鉢—外行花文帯—珠文帯—内行

花文帯—櫛齒文帯—平縁となる。花文鉢座をなす外行花文帯は弧線表出により8個（内2個は推定）の花文を描く。珠文帯には不均等に配された6個の乳と32個の珠文があり、6個の乳の内2個にはΩ状の乳座が巡る。内行花文帯には16個の弧線が描かれる。櫛齒文帯は61本で構成されている。このような文様構成から珠文鏡としてよからうが、寡間にして類例を知らない。

(小柳)



第26図 第2号墳出土鏡 ($\frac{1}{1}$)

長径復元7.8cm、短径6.7cm、厚さ8mmを測る。その鉢の縁には銀象嵌が施される。それは、一条の波状文とそれによって出来る孤文部の内側にC文状の文様を刻むものである。この鉢とはほぼ同形同大で同文様のものが宮崎県の西都原古墳群で出土している（『宮崎考古』第4号）。

(小柳)

馬具 (第27図1～4)

1は径0.6cmほどの鉄棒を、一方の先端が鉄棒の上にくるようにして、環状に作りだしている。轡に伴う引手の一方に相当するものであろう。2は中央部を内側に入りこませた鉄具である。長さ5.6cm、最大巾3.4cm、径0.7cmを測る。3は長さ4.7cm、巾2.4cm、厚さ0.3cmを測り、径0.4cmの孔が3個ある。4は長さ2.8cm、巾1.9cm、厚さ0.4cmを測り、先端部は角張る。2個の鉄留金具を有する。3、4とも鉄地金銅張で雲珠または辻金具に伴う脚である。

(土居)

鉄鎌 (第27図 5~11)

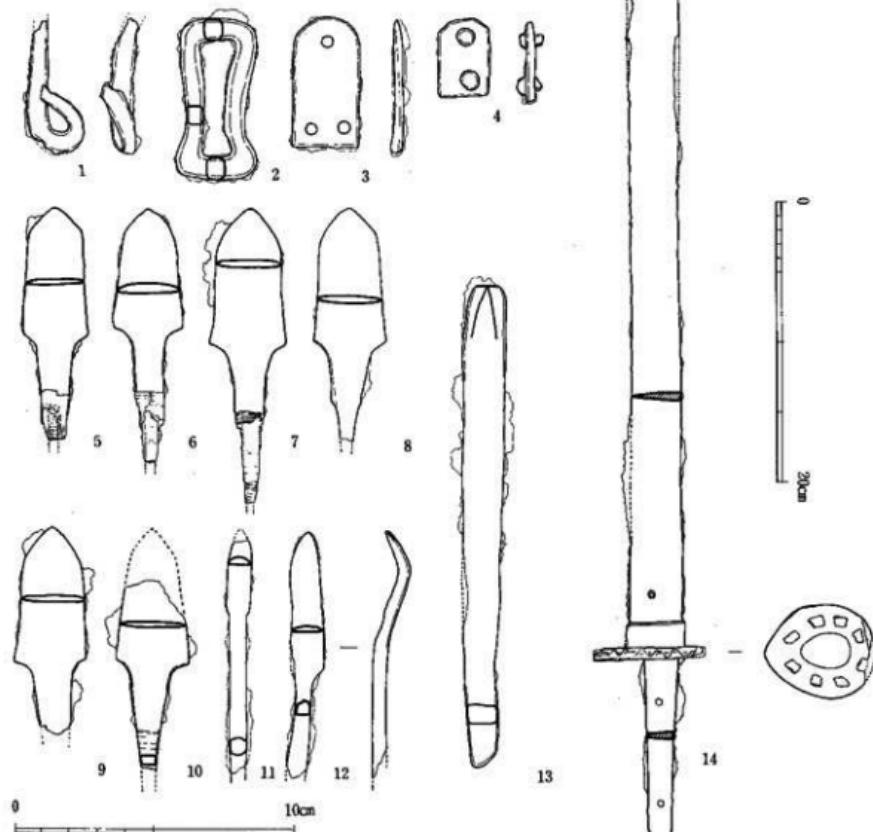
鉄鎌は尻床上とその他の床面で出土した。まとまりは認められない。5~10はほぼ同様の形態をなす。5は両丸造五角形式、6~10は両丸造三角形式。11は片丸造整筋式である。

(小柳)

鉈 (第27図12)

12は鉈。現存長8.8cmで、先端部約4.8cmが幅広くなっている。

(小柳)



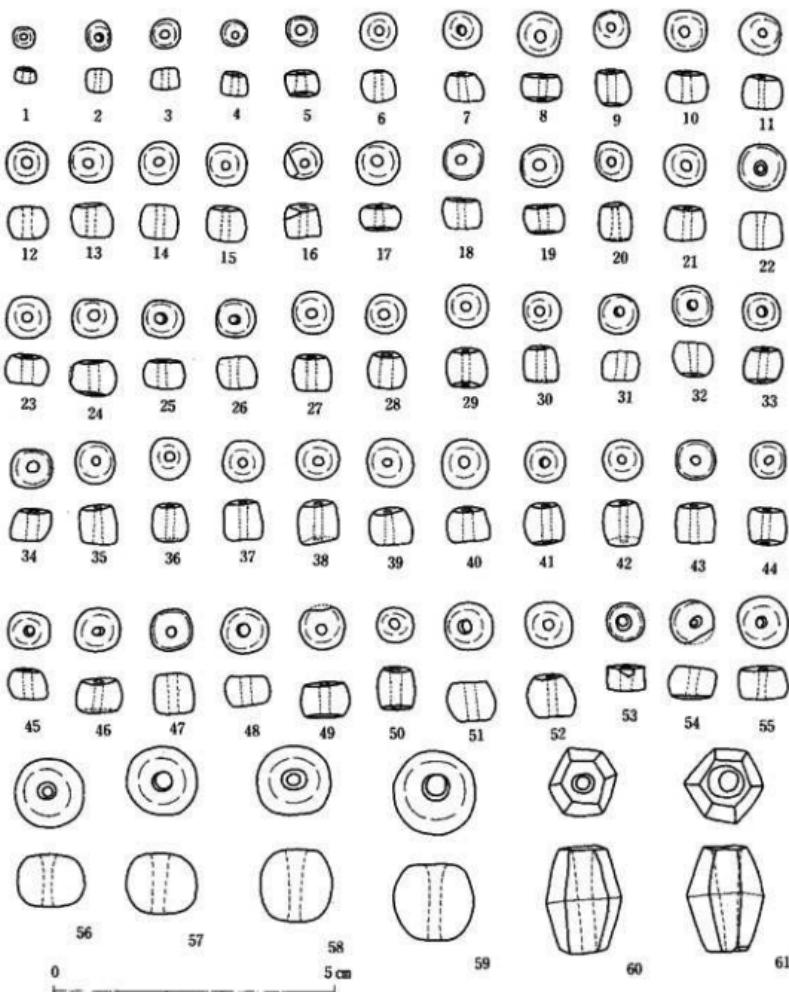
第27図 第2号墳出土鉄器 ($\frac{1}{2}$, ただし直刀は $\frac{1}{4}$)

鑿 (第27図13)

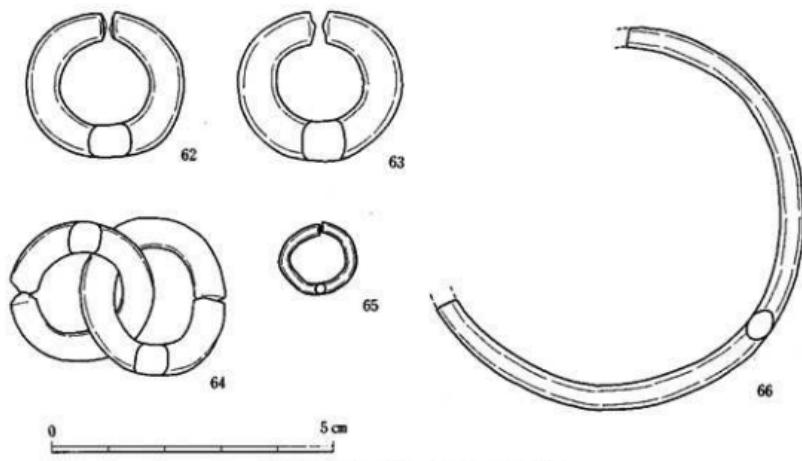
13は平鑿である。全長17.3cmで厚さ1.1cmを測る。身の断面は方形で、刃は両刃である。

(小柳)

装身具 (第28、29図)



第28図 第2号墳出土装身具(1) ($\frac{1}{1}$)



第29図 第2号墳出土装身具(2) ($\frac{1}{1}$)

第2表 第2号墳出土玉類観察表

径 (mm)	孔径 (mm)	厚さ	色 調	径 (mm)	孔径 (mm)	厚さ	色 調
1 3.2×3.8	1.1×1.2	2.9	コバルトブルー	33 5.0×5.1	1.7×1.3	6.3	コバルトブルー
2 4.1×4.4	1.2×1.1	3.8	スカイブルー	34 6.1×5.0	2.0×2.0	5.5	■
3 3.9×4.5	1.2×1.2	3.8	ライトグリーン	35 5.0×5.5	1.7×1.9	7.0	■
4 3.9×4.4	0.9×1.4	4.1	コバルトブルー	36 4.5×4.3	1.4×1.7	5.8	■
5 5.4×3.9	1.7×2.3	4.5	ライトコバルトブルー	37 5.0×5.1	1.4×1.3	7.0	ダークコバルトブルー
6 5.1×5.4	1.1×1.5	5.4	コバルトブルー	38 4.9×6.0	1.2×1.5	7.5	コバルトブルー
7 5.0×5.0	1.4×1.9	5.1	■	39 5.5×6.1	1.2×1.6	7.7	■
8 6.2×5.9	1.4×2.0	4.9	■	40 5.8×6.4	1.9×2.0	4.9	■
9 4.9×4.4	1.7×1.7	6.2	■	41 4.5×4.1	1.7×1.8	7.8	■
10 5.9×5.7	1.9×1.8	5.5	ライトグリーン	42 4.2×4.8	1.2×1.1	7.9	■
11 4.7×5.4	1.1×1.1	6.0	コバルトブルー	43 5.9×5.8	1.1×1.2	8.0	■
12 5.1×4.9	1.8×1.9	5.8	■	44 5.8×5.2	1.2×1.1	6.2	■
13 5.1×5.0	1.9×1.2	6.0	■	45 5.1×5.3	1.9×1.8	5.1	■
14 5.1×4.9	1.2×1.8	5.6	ダークコバルトブルー	46 6.3×6.5	1.5×1.5	6.5	ライトコバルトブルー
15 4.8×4.7	1.1×1.9	5.4	コバルトブルー	47 5.3×6.2	1.1×1.9	7.1	コバルトブルー
16 5.1×5.8	1.2×2.2	6.1	■	48 5.8×6.3	1.9×1.6	5.5	ダークコバルトブルー
17 5.6×5.4	1.8×1.9	4.8	ダークコバルトブルー	49 6.0×6.6	2.0×1.6	6.1	コバルトブルー
18 5.0×4.7	1.5×1.7	5.2	コバルトブルー	50 5.0×5.5	1.9×1.9	7.4	■
19 5.8×5.0	1.8×1.8	5.1	ライトコバルトブルー	51 5.8×5.2	2.0×1.8	6.9	■
20 4.5×4.2	1.2×2.2	7.0	コバルトブルー	52 4.2×6.2	1.4×1.6	7.2	ダークコバルトブルー
21 5.1×5.9	1.8×1.9	5.9	■	53 6.6×6.8	2.5×2.0	4.5	灰 色
22 6.1×6.6	1.8×1.8	6.6	■	54 7.0×7.2	1.8×1.8	5.4	黒 楽 色
23 5.9×5.5	1.8×2.0	5.2	■	55 7.8×7.5	1.4×1.1	5.8	■
24 5.8×5.5	1.9×1.6	6.5	ライトコバルトブルー	56 9.0×8.9	2.8×2.2	9.2	コバルトブルー
25 6.1×5.7	2.0×1.9	5.1	コバルトブルー	57 7.5×6.4	3.4×2.4	10.7	ブ ラ ッ ク
26 5.1×5.4	2.1×1.8	5.4	■	58 7.6×7.2	4.8×2.2	12.8	ライトグリーン
27 5.4×6.0	2.1×2.4	5.5	ダークコバルトブルー	59 9.6×5.9	3.8×2.5	13.3	■
28 5.0×4.9	2.0×2.5	5.5	コバルトブルー	60 8.1×8.4	4.1×2.8	19.1	半 透 明
29 5.0×4.7	1.2×2.0	5.8	ライトコバルトブルー	61 7.9×7.0	6.1×2.5	18.9	■
30 4.3×5.1	1.1×2.9	6.4	■				
31 5.0×4.9	1.7×1.9	5.2	■				
32 5.2×4.1	1.5×1.2	6.1	■				



1～52はガラス製の小玉で、両端部が平坦になるものと丸みを帯びるもの、胴部が直線的なものと張るものがある。53は滑石製の白玉である。一部欠損している。54・55は土製練玉である。54・55とも胴部は黒褐色を呈しており、両端は使用の際に剥げ落ちたため茶褐色を呈する。部分的に剥落している。56～59はガラス製の丸玉である。58はほぼ球形を呈する。60～61は水晶製の切子玉である。60は稜が鋭く入っており、各辺間は直線的である。61は全体に丸みを帯びている。片側穿孔である。62～65は耳環である。64は2個の金環を連環状にしたものである。66は銅鏡である。断面は梢円形を呈しており、推定径は7.0cmである。

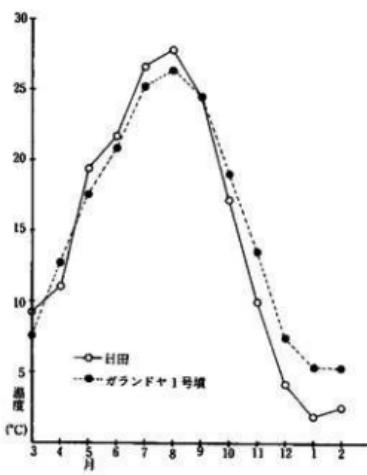
(土居)

3 自然科学的調査

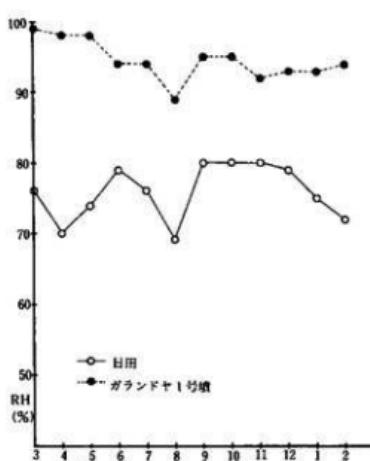
(1) 溫湿度測定

ガランドヤ古墳（1、2号墳）は装饰古墳である。これらの古墳は長年月にわたる封土の流出で石室がむき出しになってしまっており、一部では雨が降れば石組の間から雨水が内部へ浸入し装饰面を伝って流れ落ちるために、装饰の剥落や劣化が激しい。また、高温多湿期には石室内部にカビの発生も認められる。

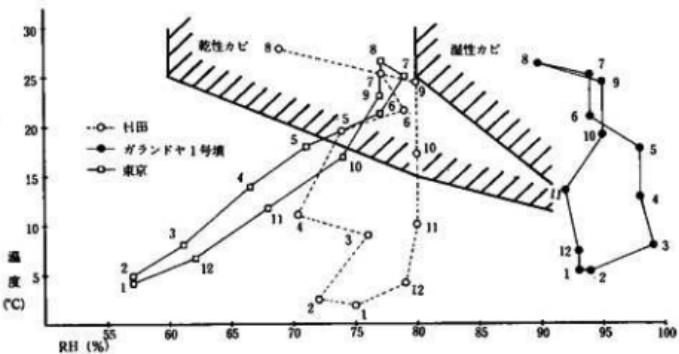
このような状況下にある古墳の保存の一環として石室内で温湿度の測定を行なった。測定は昭和60年3月13日より始め、翌年の2月28日まで行なった。測定装置は1号墳の玄室中央部、床面より約70cmの位置に設置し、1週間に1度チャート紙の交換、アースマン通風乾湿計により1ヶ月に1度の測定装置の校正を行なった。測定値の月平均値と日田測候所における月平均値をもとに第30図～第32図を描いた。なお石室は、6月14日から7月18日の期間を除き全体を



第30図 月別平均温度



第31図 月別平均湿度



第32図 クリモグラフ

ビニールシートで覆った。石室内では前室と玄室を分ける玄門の部分を、6月14日から9月25日の期間を除きビニールシートで塞いだ。また前室に通じる羨道の一部では、6月14日から7月31日まで発掘調査が行なわれた。これらの条件を考慮に入れ第30図～第32図をみると、石室内の温度は日田市内と比べ春から夏にかけてやや低く、夏から秋にかけて反対に高い。これは外気の影響が石室内へ徐々に現われるためと考えられる。本来、封土のある石室内であれば10°C前後で、外気に1～2ヶ月遅れ徐々に変動するはずである。冬期では、日田市内での最低温度が-6.8°Cであるのに比べ石室内では3.8°Cであった。装飾や石材の剥落あるいは劣化(風化)は、一般に凍結により著しく促進される。ここでは石室全体をビニールシートで覆っているため、石室内ではいくらか温度が高くなり凍結が起きなかったとも考えられる。しかしビニールシートの覆いがなかった場合でも、石室が半分地面に埋まっていることで地下水の影響を受け、やはり凍結は起きなかつたのではないだろうか。湿度は日田市内に比べ石室内では絶じて高く、ほぼ90%以上を保っている。封土のある石室であればもっと高い値を示すのが普通で、これもやはり外気の影響を受けているといえる。特に、8月は玄門部分を塞いでいたビニールシートを取り除いていたために、市内での湿度が下がるにしたがい石室内でも下がったようである。第32図のクリモグラフから、カビの発生域は低温で湿度が90%以上については描いてないが石室内での温湿度値から、4月～11月までは十分カビの発生を予期できる。実際、春から夏にかけてカビの発生が認められたので、9月25日にホルマリン(3%溶液)を散布した。この後、再びカビが発生したので2月12日に再度ホルマリンを散布した。なおカビの同定については今回行なっていない。カビは、チャート紙の交換時に衣服や靴の裏に付着して菌が石室内へ持ち込まれる、あるいは石組の隙間を通して外部から直接侵入するなどして発生したものと思われる。

今回の調査結果からガランドヤ古墳の保存については、石室に封土をもうける、あるいは石組の隙間を粘土などを用いて塞ぐといった処置が必要であろう。また装飾をほどこした奥壁などでは、石材の表面が劣化のため薄皮を剥ぐように装飾もろとも剥がれ落ちている部分があり、石材自体の保存処理も必要かと思われる。なお3月の月平均値は途中からの測定値をもとにした値で、ここでは参考値であることを明記しておく。

(山田)

(2) 顔料分析

ガランドヤ第1号墳の彩色顔料について材質分析を行った。以下その結果を報告する。

彩色に用いられた材料の材質を知るため、X線分析により成分元素及び構成鉱物の分析を行った。

〈試料〉

奥壁、主として、向って右上部分で、白、赤、緑、橙色彩色部分より、極く微量の分析試料を採取した。

〈分析・測定〉

X線回折分析により次の鉱物を検出した。(日本電子KK、X線回折分析装置 JDX-10PS、測定条件: 40kV—20ml)

試 料	検出鉱物
白色	ハロイサイト、メタハロイサイト、曹長石、 α -石英、角閃石
赤色	赤鉄鉱、メタハロイサイト、曹長石、 α -石英
緑色	海緑石、曹長石、 α -石英
橙色	?

構成鉱物から、それぞれの彩色材料は、次のような彩色顔料と同定した。

白色顔料 白色粘土

赤色顔料 赤色粘土 主成分としてベンガラ(赤鉄鉱)を含む赤色粘土

緑色顔料 主成分として海緑石を含む緑色粘土。

橙色顔料とみられるものは、量的に少く、はっきりした回折線が認められず、不明であった。蛍光X線分析も行ったが、極微少の鉛と思われる回折線も認められたが、不確定であり、ストロンチウム、ジルコニウム等が検出されず、粘土でなく、壁画の彩色材料とは認められない。

白、赤、緑の彩色顔料は、福岡県、王塚古墳をはじめとする、多くの装飾古墳より、X線分析で検出した材料と同種のものである。

(江本)

第IV章 大分県の彩色系装飾古墳

大分県の装飾古墳は、壁画系と横穴系に分けられ、これまで両者で21基が確認されている。このうち壁画系古墳は、筑後川上流域にあたる日田市に4基、玖珠町に2基あり、あとは大分市、別府市、東国東郡国見町にそれぞれ1基づつある。その中で、玖珠町鬼ヶ城古墳、大分市千代丸古墳、国見町鬼塚古墳は線刻を施した装飾古墳であり、彩色を施す装飾古墳は日田市に集中している。そしてこの古墳は、地理的な条件から筑後川流域の福岡県浮羽郡や朝倉郡周辺の装飾古墳の影響を強く受けたことが推察される。

ここでは先ずその古墳の概要を述べ、いくつかの問題点について触れてみたいが、これらの壁画は、現状では文様の判読がかなり困難な部分もあることを付記しておく。またガランドヤ古墳については前章に譲った。

(穴觀音古墳)

ガランドヤ古墳の南約700mの台地上に位置し、径10m、高さ2mの墳丘を残す円墳である。石室は全長約7mを測る複室石室で、前室奥行2.6m、幅2m、後室奥行3m、幅2.3mを測り羨道部の一部を失っている。また石室は大形の腰石を用い、持ち送りの少ない長方形プランをなす。

壁画は、赤・緑の二色で描かれ、奥壁に同心円文と三角文の幾何学的文様が、後室奥壁寄りの右壁に円文・鳥が描かれている。また前室の両腰石には同心円・舟・両手足を広げた人物が認められる。特に前室の同心円や舟は、輪郭線の内部をたたき塗めており筑後川流域では珍しい手法である。

(法恩寺山3号墳^{註1})

日田盆地東南部の半ば独立した丘陵上にある。7基からなる古墳群のうちの1つで石室は全長8mを測り、後室奥行2.4m、幅2.3m、高さ2.3mである。前室は奥行1.9m、幅2.5m、高さ1.9mと横長に作られ、中央の通路を挟んだ左右は板石を立てて屍床とし、平面プランは三昧線胴形をなす。また壁画は、奥壁に大石を立て、それ以外は最下段から扁平割石を平積みにし、天井部に向って次第に迫り出させてその空間をせばめている。

壁画は、赤色のみで描かれ、奥壁に円文1個、奥壁寄りの右壁に円文・同心円文が9個あり、後室は円文を主体とした構図で描かれている。前室は、後室に至る左右袖石とその上に架構した櫛石に描かれ、袖石左側に馬と人物、右側に騎馬人物像らしきもの、櫛石に同心円文・鳥が描かれている。また羨道より前室に通ずる袖石の左側内面には胴長の四足獸と円文が描かれている。

(鬼塚古墳)

筑後川上流の玖珠川左岸にあり、万年山山麓から伸びるゆるい傾斜地に位置する円墳で、墳丘の原形をほとんど失っている。

石室は羨道部を失い、後室奥行約3m、幅2.2m、高さ3m、前室奥行1.8m、幅2.2m、高さ

2.1mを測る。また石室各壁の腰部は巨石を用い、その上方も大きめの石を横にしてわずかに迫り出しを認める。

壁画は、赤色による円文を中心とした構図で、後室奥壁と左右両壁、後室と前室の間にある右袖石の前室に面した位置に描かれる。特に奥壁は三重の大形円文を中心とした円文群で力強さを感じる。また袖石の同心円文は緑色の縁取りがあったと伝えられるが現状は明らかでない。なお鬼塚古墳と玖珠川をへだてた小岩肩山麓には線刻による鳥や木葉を描いた鬼ヶ城古墳がある。

(鬼の岩屋 1号墳)

別府湾に面した緩い傾斜地に位置する古墳で、現状で径21m、高さ5.2mの封土を残す。石室は後室奥行2.3m、幅2.3m、高さ3.5mで、前室は奥行・幅共に1.3mの方形プランを呈し、腰石は巨大な石を並べその上方も比較的大形の自然石で築積している。また奥壁側には扇子形の組合せ石棺が存在し、前室左は板石を立てた小仕切が設けられている。

壁画は、前室の右壁に白色顔料で三角文が5つ並列して描かれているが、その他にも存在したと思われる。また壁画は全体を赤く塗り、重ね塗りの可能性がある。なおこの古墳の西側約50mには鬼の岩屋 2号墳が所在し、ここでは最近、四神図及び日・月象の壁画復原が報告されて^{註2}いる。しかしこれについては賛否両論があり本稿では除いた。

さて、ガランドヤ古墳群をとりまく、県下の6基の装飾古墳の位置についてみると、先ず法恩寺山3号墳は、律令時代の日田郡家の推定地である駅編郷に位置し、この一帯は5世紀以後に駆負部を統率した日下部氏の本拠地といわれる。

穴観音古墳は三隅川左岸の台地上に位置し、ガランドヤ古墳と共に古代石井駅の推定地である石井郷に属する。石井駅は、筑前朝倉郡把伎駅から豊後に入ってから最初の駅であり、石井郷一帯は弥生時代以来の東西交流の要地であった。

鬼塚古墳の所在する玖珠盆地は、鬼塚古墳の東側約1kmに唯一の前方後円墳で5世紀代の龜都起古墳が所在するが、以後は鬼塚古墳に近接する伐株山の中腹から北西に伸びた丘陵上に石棺や横穴式石室を主体部とする円墳が連なり、一帯は和名抄にみられる小田郷の中心地となるようである。

鬼の岩屋 1号墳は、江戸末期の碩学者帆足万里の「肆業余稿」に紹介され、早くから開口していたようである。古代においては、速見郡朝見郷に属し、郡家や駅の所在が推定されている。また鬼の岩屋古墳周辺には多くの古墳が分布していたと伝えるが今はほとんど姿を消している。このうちわずかに原形をとどめる太郎塚古墳では、金銅製唐草文透彫鏡板が出土しており、かつての古墳分布状況等からこの一帯が6世紀～7世紀にかけて中心的な位置を占めていたと思われる。

以上のようにこれらの装飾古墳は、その地域においては中心的な位置に所在し、政治的にも大きな権力を握った有力層の墳墓とみることができる。しかし墳丘は10～20m程度の円墳であり、必ずしも突出した規模を誇るものではない。

次に石室の構造は、全ては前・後室からなる複室石室で、平面プランは方形、断面は持ち送りの少ない箱形を呈して腰石に大形の石を用いるのが一般的である。

このうち法恩寺山3号墳は、前室の横幅を広くとり持ち送りの強い典型的な三昧線胴張りを呈しており、県内では類のない石室構造である。

しかも壁面は腰石を用いず、最下段より石材を平積みにしている。この様な石室構造は、福岡県甘木市や朝倉郡を中心に広く分布しており、装飾古墳としては線刻のある朝倉町狐塚古墳の類例を指摘することができる。またガランドヤ2号墳も前述のように今回の調査によって胴張りが確認されたが漢道部等の状況は不明である。しかし露出した東側の状況からみると、全長約7.6mを測り、これから玄室内を差引くと残りが4.3mとなり、この全てを狭道とすると、この地方では他に例をみない長い狭道ということになり、おそらく小規模な前室を伴う複室石室と思われる。この様なタイプの石室プランは、福岡県浮羽郡吉井町古畠古墳^{註4}などに求められ、法恩寺山3号古墳とは系譜を異にすることが指摘される。

また壁面の面から検討すると、先ず図柄の顔料は赤・緑・白の3色が用いられている。このうち穴観音古墳は赤・緑を用いており、ガランドヤ古墳と共に特色をもつ。また、鬼の岩屋1号墳は白色顔料で文様が描かれているが、石室全面を赤色で塗った後に重ね塗りしており、赤色の地塗りに緑色を配したガランドヤ2号墳と相似た手法をもっている。さらに鬼塚古墳は、基本的には赤色で描かれているが、袖石の同心円文には緑色の縁取りが伝えられている。こうしてみると赤色顔料1色による壁画は法恩寺山3号墳だけとなり、石室構造だけでなく配色の面でも他の古墳とは異なる。

次に図柄とその描かれた位置についてみると、穴観音古墳は奥壁に同心円と三角文の幾何学的文様を中心にして、後室右壁と前室左右壁の腰石に人物・舟・鳥・同心円文等が描かれている。また法恩寺山3号墳は、奥壁と後室右壁は円文だけが描かれ、人物・鳥等の具象図は前室に面した袖石に描かれる。さらに鬼塚古墳においては、福岡県吉井町日ノ岡古墳の奥壁を思わせるような全体に同心円文が描かれている。つまりこれらの古墳では後室の構図は、幾何学的文様が中心となっており、人物や舟などの具象図は前室に描かれている。この点からみるとガランドヤ1号墳のように奥壁に多彩な図柄を配置した構図はこの地域では特異な存在と言えよう。

以上、県内に分布する彩画を施す装飾古墳についてガランドヤ古墳と対比しつつ述べたが、これらから法恩寺山3号墳は、他の装飾古墳とは石室構造、色の配色等にちがいをみせ、筑後川南岸沿いに伝播する古墳文化とは別に、甘木・朝倉周辺の影響が強く伺える。しかしその影響は、法恩寺山3号墳にとどまり、その後に広く伝播することはなかったようである。

最後にこれらの装飾古墳の年代についてみると、九州に存在する装飾古墳の色の組み合せから、全体としては終末期に近い年代が与えられる。また図柄においても器物の图形は少なく、人物・鳥獣像が主であり同様な年代が指摘される。

このうちガランドヤ2号墳は緑色1色で描かれ、また石室の構造から吉井町古畠古墳に近いことが推定され、複室構造が定型化する以前のものとして6世紀中頃までに遡ることが可能で

あり、出土した須恵器からもその傾向が指摘できる。一方、同じ胴張りをなす複室構造の法恩寺山3号墳は、奥壁以外の壁面に腰石を用いず最下段より石材を横積みにしており、やや古式の觀をもたせるが、このような構造は甘木市柿原古墳群など甘木市、朝倉郡周辺では顯著である。またガランドヤ1号墳や鬼塚古墳は胴張りを有しないものの腰石に大形の石材を用いず、石材の構築の面では1号墳に類似することが指摘され、穴觀音古墳よりは古い年代が考えられる。このうち鬼塚古墳は、後室が前室の2.5倍の奥行を有する長方形プランを呈し、壁画も同心円・円文のみで構成されており、ガランドヤ1号墳と同時期ないしはそれを遡る年代も考えられる。

以上から県内に分布する彩色を施す装飾古墳は、ガランドヤ2号墳を6世紀中頃、1号墳と鬼塚古墳を6世紀後半、法恩寺山3号墳を6世紀末～7世紀初頭に位置づけられ、穴觀音古墳と鬼の岩屋古墳も法恩寺山3号墳とほぼ同じ年代が考えられる。
(渋谷)

註1 貢川光夫・小田富士雄他『法恩寺山古墳』日田市教育委員会 1959年

2 坂田邦洋・副枝幸治「鬼の岩屋第2号墳の壁画について」『別府大学紀要』第26号別府大学会 1984年

3 古賀精里・渡辺正氣「筑前国朝倉郡孤塚古墳」『福岡県文化財調査報告書』第17編 1954年

4 小林行雄「装飾古墳」1964年

5 福岡県教育委員会「甘木市所在柿原古墳群の調査」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』4
1983年

第V章 まとめ

大分県には熊本・福岡両県に次いで装飾古墳が多く存在している。しかし、それらの古墳が必ずしも全て正しく周知されているとは言いがたい。その原因の一つとして正式調査がなされた古墳が少ないことがあげられるだろう。発掘調査が行われたのは今回が初めてであり、その意味では今回の調査が大分の装飾古墳研究の新たな展開と本格的な保存対策への第一歩になるものと考えている。そこで、ここではその前提としてのガランドヤ古墳の年代的位置付けと装飾の持つ意味について考え、まとめに代えたい。なお、他の大分県の装飾古墳については第IV章を参照されたい。

(小柳)

1 年代について

1号墳は、閉塞石と思われる河原石と共に移動した状態で、主に前室において須恵器が出土している。それによると壙は口径11.0cm~11.2cmで、底部付近約二分の一に窪削りの跡を残す。高壙は壙部に明瞭な稜線を有し、長脚の二段透かしである。これらの諸特徴から概ね小田編年のIII b期でも新しい所に位置付られる。

2号墳は、土器の出土が少なく小片が多いが、縁や甕の口縁部の形状からIII a期にまで遡る可能性があるものが含まれる。壙や平瓶はIII b期のものである。

次に石室の構造であるが、1号墳と2号墳ではその平面プランに差がある。1号墳は、長方形の玄室にほぼ方形の前室を持つものに対して、2号墳は前室の有無については不明であるが(あったとしても小規模のものである)、玄室は胴張りプランの平面形を呈す。また、使用石材は两者とも安山岩であるが、レヴェルを整えるために使用する板状安山岩の全石材に対する比率は1号墳のほうが小さい。また、使用石材も全体的に小振りである。このため、2号墳の方が丁寧な造りに見える。これらの各要素は、築造時期の前後関係を示す可能性がある。ところで、地理的に近く、最も日田地方の古墳に影響を与えたと思われる浮羽地方の古墳については、早くからその編年研究が行われており、主要な古墳の変遷が説かれている。^{註1}それによると横穴式石室出現以後、石室構築技法や石室プラン、使用石材の違い等から塚堂古墳→日の岡古墳→塚花塚古墳→重定古墳→楠名古墳の築造順序が想定されている。(このうち日の岡古墳から重定古墳までは装飾古墳である。)そして、これらの古墳とガランドヤ1号・2号墳とを比較すると石室構造に類似点が多く、彼地の変遷に従えばガランドヤ古墳群においては胴張りプランで板状安山岩を多用する2号墳から箱形構造に近い1号墳への変遷を想定する事ができる。このことは、2号墳の出土品にIII a期にまで遡る可能性のある須恵器や主に5世紀代に盛行する珠文鏡、滑石製白玉など1号墳と比べて古い要素を持つ副葬品が含まれている事からも首肯できよう。

以上の事から、2号墳、1号墳は浮羽地方において日の岡古墳出現以後、即ち6世紀中葉から後半に順次築造されたものと考えられる。

ところで、日田盆地周辺では、律令時代の“郷”と古墳の関係がしばしば指摘されている。^{#2}
地理的環境の項でも述べたように、ガランドヤ古墳群の位置する所は石井郷と考えられており、
石井郷内にはこの他石室内容の明らかな後期古墳として穴観音古墳(装飾古墳)と惣田塚古墳が
存在する。この古墳は、複室で箱形構造を呈しており、また奥壁の処理など石室構造がガラン
ドヤ1号墳に非常に類似している。前述したように使用石材の大きさ、板状安山岩の多寡、側
石の持ち送りの大小が編年の決め手になるならば、ガランドヤ1号墳→惣田塚古墳→穴観音古
墳の順で変遷したことになるであろう。

(小柳)

2 壁画について

ガランドヤ1・2号墳は、両者相接して共に壁画をもつという点で、装飾古墳全般に照ら
してもきわめて貴重な遺跡である。以下両古墳の壁画について、今回の調査の時点で指摘でき
る二・三の点について言及しておきたい。

壁画の構図と構想：1・2号墳は至近の位置に近接してあるにもかかわらず、壁画としての
構図は全く対照的である。この差異は前項で述べられたような両古墳の年代の差異にも起因し
ようが、構想そのものの根本的な違いは否定しがたい。まず1号墳は奥壁の約2.5m×1.7mの
平面全体にわたって、パノラマ的に多彩な図柄を配置している。ほぼ明瞭に読みとれる図柄だけ
を見ても、壁面左上部から下方へ人物、鞍をつけた馬らしい四足獸、円文、舟がある。両手
をひろげた人物の左右の図柄について日下八光氏は右が鞠、左は高环としている。^{#3} 四足獸の下
方の図柄は盾であろうか。画面中央部は不明のところが多いが、鳥、四足獸、舟、波等は明ら
かに読みとれる。日下氏はこの部分の上半部に、青竜、白虎、朱雀、玄武の四神図が描かれてい
ることを指摘された。現状でいえば氏が白虎にあてた四足獸、朱雀にあてた鳥は、図柄とし
ては判読できるが青竜、玄武にあてた部分は損傷がひどく、それらしい生物の図柄を確認する
ことが出来なかった。

日下氏の見解で注目される今一つの点は、S字状の図柄と画面下方の十字状の図柄である。
氏は前者を雲(飛雲)、後者を鳥(飛鳥)と解した。ともに興味深い指摘である。四神図の解釈
は今後を持つとしても、舟と波に加え飛鳥や飛雲とみられる図柄があるとなれば、全体の構想
は、ある程度観念的思惟に裏づけられた世界観や他界観を示唆しているといえることになる。
画面右半部がほとんど失われているため全体像を把握できないのが残念であるが、壁画として
の構想、構図という面からは本邦の装飾古墳の中でもきわめて特異な資料であることは確かで
あろう。

一方2号墳については、奥壁に赤で地塗りした上に、緑色で山形連続文、同心円文を配し、
これに騎上射弓の図をえたものである。山形文、円文がいわば幾何学的図柄であるのに対し
騎上射弓図のみが、きわめて具象的に描かれている点が注意をひく。この種の図柄は福岡県の
五郎山古墳や瀬戸第14号古墳にも見られ、特に五郎山古墳のものとの類似性が注目されるが、
^{#5} 出来としてはこれらに優るとも劣らぬ仕上りである。ただ山形文、同心円文との対比を考えれ

ば、この部分がやや恣意的に配された感じは否めない。

さて森貞次郎氏は、横穴式石室の彩色壁画について I～VI の様式をたてている。即ち I [辟邪除魔の幾何学文、大の字形小人物像、双脚輪状文等をもつもの]、II [I の図文に初、盾、大刀、弓など形象図文が加わるもの]、III [I・II が奥室中心となり、前室に人物・馬・船など供奉獻の図文を配するもの]、IV [上記の前室・奥室の区別のなくなるもの]、V [奥室中心に叙事的表現が集中するもの]、VI [自由画風線刻画] 等である。氏はこれらは発生的には I～V の順であらわれ、それぞれ六世紀末までその形式を累積的に残していたとみている。この分類に従えばガランドヤ 1・2 号は IV・V 形式に属する。IV 形式から V 形式への流れは自然な移行であろうが、筑後川流域では特に吉井町富永地区の珍敷塚古墳、鳥船古墳、原古墳等の壁画との共通性が指摘できるところである。しかしそれとも鳥 (珍敷塚、鳥船塚)、舟 (珍敷塚、鳥船塚、原)、人物 (同左) といったふうに、図柄の画材の上で共通性があるというだけであって、各個の図柄の仕上り、全体の構想という点では、やはり強い個性をもっているものである。この点は同じ日田地区的法恩寺山古墳 3 号、穴観音古墳に対してもいえることであり、特に注意しておくべき特色といえよう。

作画技法等：作画にあたっては、1・2 号とも、石室構築の途次又は完成後描いたのである。1 号墳の壁画左上端部の図柄など、明らかに石室側壁にさえぎられて完結しない仕上りとなっている。筆具は 1 号については、やや硬質の筆状のものを用いたのである。筆具は赤・緑それぞれ少くとも 1 本ずつ用意したらしい。全体に赤色を先行し、あとで緑でふちどりする図柄が多いが、下部の飛鳥のように逆になっているものもある。ここに表記された人や船、馬などの各個体の本来の形象の多彩さを考えれば、これを活写するに自在な筆づかいが可能なはずだが、全体に筆運びは單調であり、表現技術上特記すべきテクニックは伺えない。ただ全体を緑と赤の二色構成で仕上げる造形の巧みさは、同時代の他の装飾古墳にてらして注目される所である。いずれにせよ壁画全体の構想を十分消化し具現した作画とは解しがたい。その事が結果として、この画面の難解さをもたらしているといえよう。

一方 2 号墳の方は、まず赤の地塗りの上に緑で図柄を画くという画法が、他例もなく独特のものである。ただこの場合、赤の地塗りは、奥壁だけでなく側壁等にもみえ、石室全体をカバーしたものらしいから、そのうえで奥壁に緑で作画したと解すべきであろう。いずれにせよ、1・2 号に共通するのは緑色の多用であろう。これはガランドヤ 1・2 号墳のもっとも大きな特色といえるものである。

葬送儀礼と古墳壁画：装飾古墳の壁画を、古墳をめぐる葬送儀礼の中でどう位置づけるかという点は、装飾古墳研究の上で重要なテーマであるはずだが、なお不明のところ多く解決すべき厄介な問題が多く残されている。

そもそも古墳、とくに在地首長層の墓とされる有力古墳をめぐる葬送儀礼には、地域における死者の送りという、きわめて土俗的な風俗と觀念に由来する行為と、権力や地位の繼承・服属の儀礼といった、きわめて政治的色彩をふくむ行為とが混然として併存しているはずである。

特にその後者については、前方後円墳を中心とする初期古墳をめぐってはしばしば論じられるが、後期古墳特に横穴式石室墳については、やや軽くみられがちである。ここでは“家族墓”や“黄泉国”的概念が過度に重んじられるせいであろう。しかし被葬者の武具を伴った盛装、乗馬の勇姿を彷彿とさせる馬具の併葬といった、有力な後期古墳を通じてみられる行為が、単に土俗の風習の普遍化ということで説明できるはずはない。権力の上層部にある者の死にかかる葬送儀礼の場では、死せる首長への哀悼、その功績の顕彰、権力の紹介と継承、それへの服属というような儀礼が行われた事は、『古事記』や『日本書紀』にみえる天皇（大王）の葬送記事で明らかである。¹¹¹⁰ こうした行為は地方の首長層の場合でも、いわばこれを矮小化した形で行われたはずなのだ。古墳に出土する“副葬品”なるものの中に、その片りんを伺う事は可能なはずである。古墳時代の葬送儀礼には、好むと好まざるとにかかわらず、こうした権力関係とかかわる体制的要素がすべりこんでいるはずなので、こうした面と土俗としての葬送慣行の読み分けが重要な問題となるはずである。この点で装飾古墳の壁画を考えるとどういうことがいえるか。幸いグランドヤ1・2号の場合副葬品が出土しているので、これとの関連で若干の考察が可能なようである。

ここでまず注目されるのは、両古墳にみられる人と馬の図である。両古墳とも被葬者は武器とともに馬具をもって埋葬されているから、壁画の人と馬がここでその被葬者と結ばれる接点はあるのである。いうまでもなく、刀と馬具を伴った死者の姿は、いわば故人の最高の盛装である。特に2号墳出土の刀には銀象嵌がみられ儀刀の可能性が考えられることも、その印象をいっそう強くしている。この姿には、葬送儀礼の、そのもっとも政治的側面すなわち地位と権力の継承儀礼の要素の影が読めることは明らかであろう。ところで壁画の人と馬の方はどうであろうか。ここで注目されるのは、2号墳の馬上射弓図である。この図が馬上の人物が弓を引く図であることは確かとしても、これが例えれば戦いの場で活躍する故人の勇姿を表現したものか、それとも狩りというような半ば日常的な生活の一コマを描いたものかは定かでない。少くとも“武人”であることを強調する表現は全くみられず、可能性としては狩りの姿の可能性が強い。当古墳のものと類似性が注目される福岡県五郎山古墳や瀬戸14号横穴の図が“狩猟図”として理解されているのもうなづけることである。これらに共通していることは、“武人”としての強調を欠くことだけではない。このような図柄自体が、壁画全体の中で強く前面に出ることがなく、いわばメインテーマとして描かれてないことである。そういう意味で古墳壁画に描かれた馬上の人の意味する世界は、石室に横たわる故人の傍に添えられた刀と馬具のイメージには連動しない。古墳における刀と馬具の副葬が古墳をとりまく葬送儀礼の、いわばもっとも制度的側面、政治的側面をより濃く反映するとするなら、壁画の中の人と馬の世界は、地域における土俗的な葬送観念の方をより色濃く表象するものとして描出されているといえよう。そういう意味では、筑後川沿岸の装飾古墳に多くみられる鳥や船の意味するところも、多くは土俗の葬送観念の共同性、あるいは地域性というところで理解できるものであろう。

当該古墳の壁画をむしろ“土俗”的位相でとらえた事由は他にもある。それはこれを一つ

の絵画としてみた場合の問題である。両古墳の壁画は、例えば緑色の多用、1号の構想のユニークさ等注目すべき特色をもつてゐるが、絵画としていえばやはり原始絵画の域を出ないものである。ここにみえる、むしろ稚拙ともいえる表現を、例えばヴォルンゲルのいう“高度の抽象化”^{註11}の結果とするわけにはいかないであろう。これらの絵の背後に、古墳時代の在地首長の身辺で折りりし描かれた“絵画”世界があり、それを描く者としての画人があり、そういう意味でこれは、六世紀における地方首長層周辺の“美術”的最高の水準を示すというふうにも読みがたいのである。これらの絵は墳丘・石室をふくむ古墳造営の過程の中で、いわばその工程の最終段階として描かれた可能性も考えられよう。この場合、石室築造技術者のうちの誰かがこれを描いた可能性も考えられるのである。その際にはもちろん造墓主側から、壁画の構図等についての負託・注文もあったのであろうが、その点を過度に評価することはむつかしいようと思われる。

結語：いずれにせよガランドヤ古墳1・2号の壁画の投げかける問題は多い。とくに時期の前後する2基の古墳が近接してあり、ともに壁画を有するという点、1号墳の図柄の多様さと構想の大きさとユニークさ、2号の赤地塗りに縁で作画する技法の特異性、両墳に共通する緑の多用等注目される所である。そして何より発掘調査により多くの出土品を得たことは、この古墳の装飾古墳としての価値をいっそう高めたといえよう。
(後藤)

註1 森貞次郎「北九州古墳の編年的考察（予報）」「西日本史学」創刊号 1949年

福尾正彦「筑後月の岡古墳とその周辺」「古文化論集」1982年

2 小田富士雄「古代の日田」「九州考古学研究 古墳時代編」1976年 所収

3 貝川光夫『法恩寺山古墳』1959年

4 日下八光氏には現地で直接指導をいただいたが、本稿の所見は、同氏が朝日新聞1983年6月20日付朝刊に寄せた記事によった

5 小林行雄編『装飾古墳』1964年 藤井功他『装飾古墳』1979年

6 森貞次郎『装飾古墳』1985年

7 前著5参照

8 註3と同じ

9 註3と同じ

10 「日本書紀」敏達紀14年8月条、同推古紀36年9月条、皇極紀元年12月ほか、とくに天武紀朱鳥元年9月条以下の天武天皇葬儀に関する条を参照

11 ヴォルンゲル『抽象と感情移入』1908年

第3表 第1号墳出土器観察表(1)

番号	器種	法量 ()内は推定	調整・器形等の特徴	備考
1	壺蓋	口 径 12.6 器 高 4.3	外面天井部にやや鋸なヘラ削りを施す。他は内外面ともヨコナデ。器壁が厚く全体的にシャープさに欠ける。端部は丸くおさまる。	完形。前室出土。
2	壺蓋	口 径(13.6) 器 高()	内・外面ヨコナデ調整後、天井部外面約辺に回転ヘラ削りが施される。端部は丸くおさまる。	片残。前室出土。
3	壺身	口 径 11.0 受部径 13.5 器 高 4.8	底部外面約辺にヘラ削りが施される。他は内外面ナデ。端部は丸くおさまる。胎土に2~3mmの小石を含む。体部外面に「引」のヘラ記号あり。	片残。前室出土。
4	壺身	口 径(11.9) 受部径(13.0) 器 高(4.3)	外面約辺に回転ヘラ削り。内外面ナデ。口唇部は比較的シャープであるが丸くおさまる。胎土に砂粒を多く含む。	片残。玄室出土。
5	壺身	口 径 11.2 受部径 13.6 器 高 5.0	内部底部に粘土巻き上げ痕残る。外面には全面に導い自然納かかる。外面回転ヘラ削りは底部の辺以上に及ぶ。比較的シャープな造りであるが、端部は丸くおさまる。	完形。前室出土。
6	高壺	口 径 10.3 高 底 11.0 器 高 16.0	無蓋高壺で長脚二段透し。三方向に透しが入る。壺部には中程で一段を有し、その下部には刺突文が巡る。伏せて焼成している。	脚と口縁部の一一部欠。玄室出土。 小破片。玄室出土。8と同一個体。
7	高壺	—	壺部の口縁部と底部の境に明瞭な段を有す。段の上には刺突文がある。	小破片。玄室出土。
8	高壺	裾 径 12.0	長脚二段透しで、三方向に穿孔する。明茶褐色の焼き上がり。	脚部は残存。玄室出土。7と同一個体。
9	高壺	口 径(11.5)	壺部にシャープな二本の突帯を有し、その下位には斜行の沈線を施す。	小破片。玄室出土。
10	高壺	口 径(13.3)	無蓋高壺。壺部に低い突帯を巡らし、その下に斜行の沈線を施す。	口縁部片残。玄室出土。
11	蓋	口 径 9.8 器 高 3.0	内・外面ナデ調整後、天井部外面約辺に回転ヘラ削りが施される。	片残存。
12	蓋	口 径(11.2) 器 高(2.7)	内・外面ナデ調整後、天井部外面約辺に回転ヘラ削りが施される。	口縁部片残。玄室出土。
13	蓋	口 径(11.0) 器 高(3.0)	内・外面ナデ調整後、後面辺にヘラ削り。内面に「X」のヘラ記号あり。ヘラ記号は細い、外面自然釉付着。	片残。玄室出土。
14	堵蓋	口 径 10.6 器 高 3.4	天井部外面ヘラ削り。口縁部は一度ややくびれた後内済みに開く。	完形。15とセットをなす。
15	堵	口 径 8.4 器 高 7.3	底部は回転ヘラ削り、それより上は頸部までカキ目調整内面ナデ調整。肩部は大きくなる。	前室出土。
16	堵	口 径9.0~10.3 器 高 7.0	ゆがみあり、扁平な体部に内傾する短い口縁部を持つ。外面回転のナデ調整、底部付近辺は回転ヘラ削り。	完形。14とセットをなす。
17	提板	口 径 11.4 器 高 23.0	口縁部は若干つまみ上げられたように延びる。頸部の背面は平坦面をなし、表面はカキ目を施すが、ナデ及び厚くかかって黄褐色の釉によって見えなくなっている。口縁部はゆがみが見られる。	前室出土。
18	腰	口 径 13.8 頸部径 3.4 体部径 10.2 底 径 6.1	口縁部は内済しながら開き、シャープさを欠く突帯をへてかなり小さい頸部へ至る。体部は斜めの刺突文をはさんで二条の沈線が入る。底部は平底をなす。下の沈線より底辺まではヘラ削り。	口縁部一部欠。前室出土。
19	提板	口 径 6.8	口縁部は若干内済ぎみながら直線的に開き、端部は丸くおさまる。扁平な体部。	体部片残。前室出土。
20	脚	裾 径(13.0)	裾部は段を有し、わずかに外反しながら開く。三角形又は台形の透しを有す。	脚部片残。玄室出土。
21	腰	—	夷の肩部近くの破片。内面円弧のタタキ、外面格子目タタキの後カキ目施す。	小破片。玄室出土。
22	土師器 壺	口 径(11.0) 器 高(4.9)	器高の3分を占める口縁部は、外反しながらほぼ直立する内外面ナデ調整。	片残。玄室出土。
23	土師器高壺	口 径(12.4)	壺部以上は外傾し立ち上がる。腰以下はヘラ削りが認められる。	片残。玄室出土。

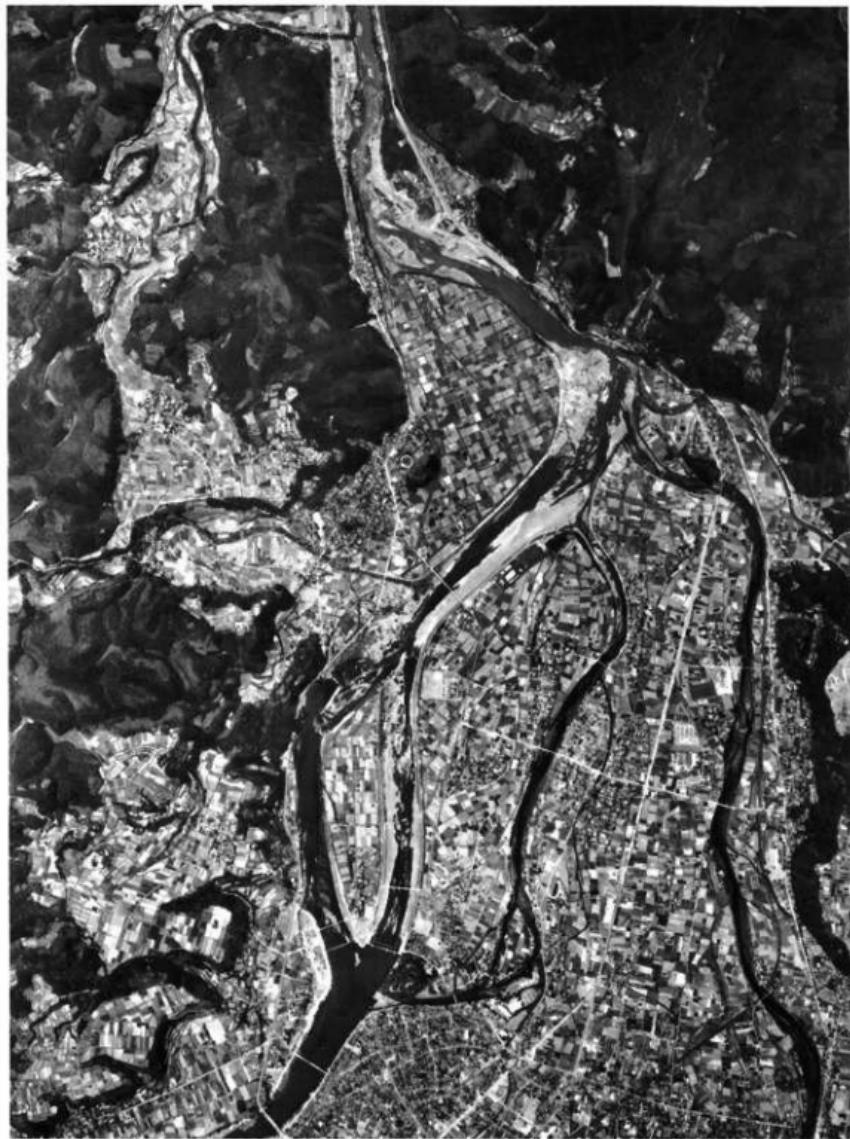
法量の単位はcm

第4表 第2号墳出土土器観察表

番号	器種	法量 ()内は推定	調整・器形等の特徴	備考
1	壺身	口 径(13.0) 受径部(15.9) 器 高(4.5) 口 径(15.8)	内・外面ナデ調整で、外面底部方に回転ヘラ削り。口唇部は丸くおさまる。	片残。埋土出土。
2	甌		口縁部は直線的に開き、口唇部はやや後を持っておわる。下部に断面にやや丸みをおびる突帯が巡る。外面には丁寧な板ナゲ彫か噴文風に施される。	片残。瓶石近く床面出土。完形。瓶石上出土。
3	平瓶	口 径 7.6 胴 径 16.2 器 高 13.1	扁球形の体部に、口唇部が肥厚し一条の沈線を有する口縁部につながる。外面口縁部以外底部までカキ目施される。	
4	高壺	—	透しはみられず、大きく聞く脚を有する。沈線が二条巡る。焼成あまく、白っぽい焼き上がりとなる。	小破片。埋土出土。
5	甌	—	口縁下に二本、その下部に二条の波状文を挟んでもう一本の突帯が巡る。	小破片。埋土出土。
6	甌	—	内・外面ナデ。口唇部は丸くおさまる。	小破片。見床上出土。
7	甌	—	外面格子目タタキ、内面円弧状タタキ。	小破片。
8	甌	—	外面格子目タタキ、内面円弧状タタキ。	小破片。

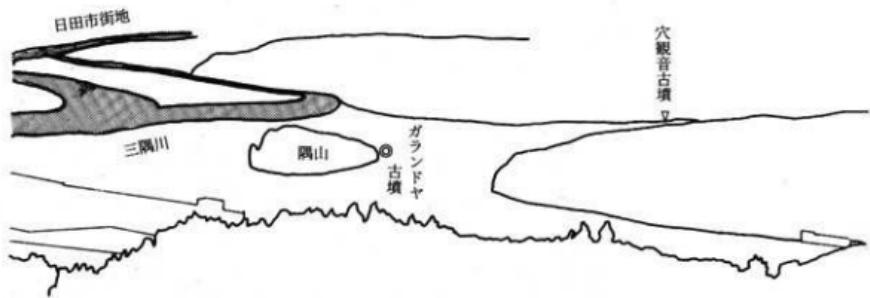
法量の単位はcm

図 版



空中写真（○印がガランドヤ古墳群）

図版 2



日田盆地遠望



第1号墳近景（東から）



第1号墳近景（南から）



第1号墳発掘調査前（上・下とも）



第 1 号墳奥壁



第 1 号墳玄室床面（前室から）



第1号墳玄門（前室から）



第1号墳羨門（前室から）



第 1 号墳奥壁上部



第 1 号墳樋石上部（玄室から）

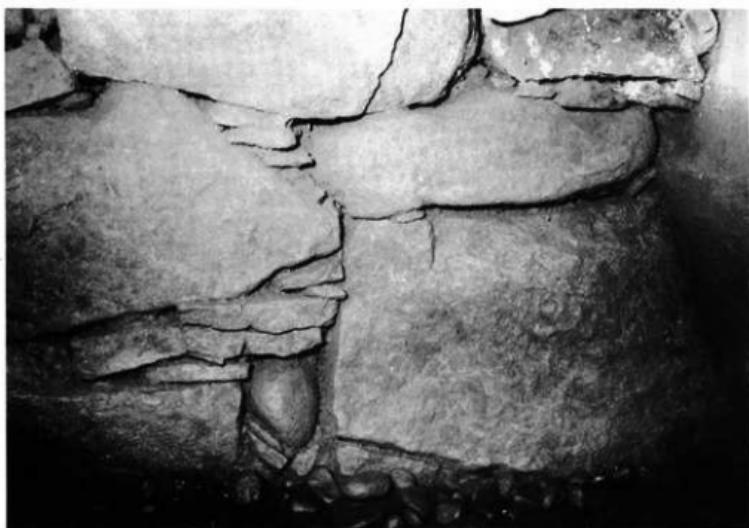
図版 8



第 1 号墳側壁



第 1 号墳側壁（後補の状況）

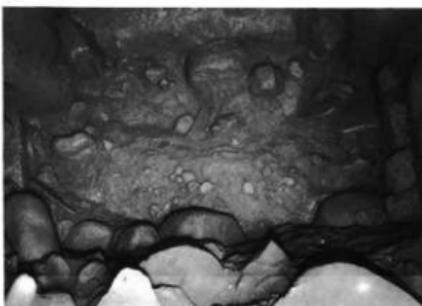


第 1 号 墓前室侧壁

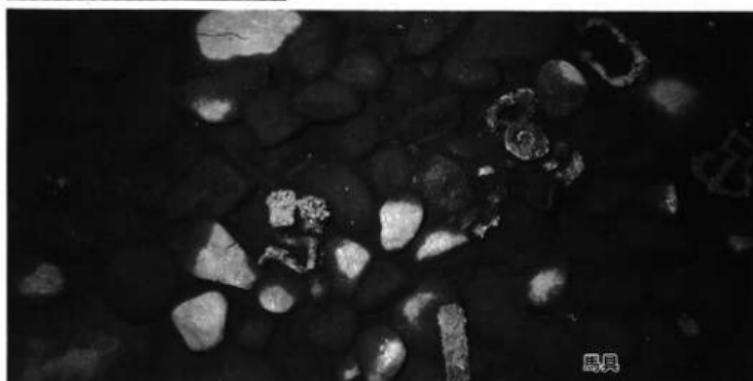


第 1 号 墓前室床面

圖版10



第1号墳閉塞施設（上、左）

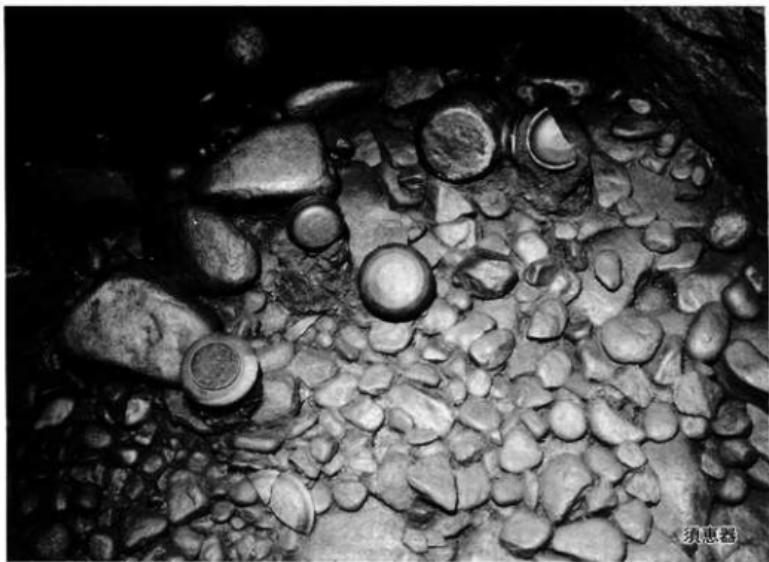


馬具



馬具

第1号墳遺物出土状態(1)（中、下）



第1号墳遺物出土状態(2)



第1号墳壁画（昭和39年撮影）



第1号墳壁画（赤外線写真）



第1号墳壁画（部分）



第2号墳遠景（第1号墳上より）



第2号墳近景（南から）



第2号墳玄室（屍床）



第2号墳玄室

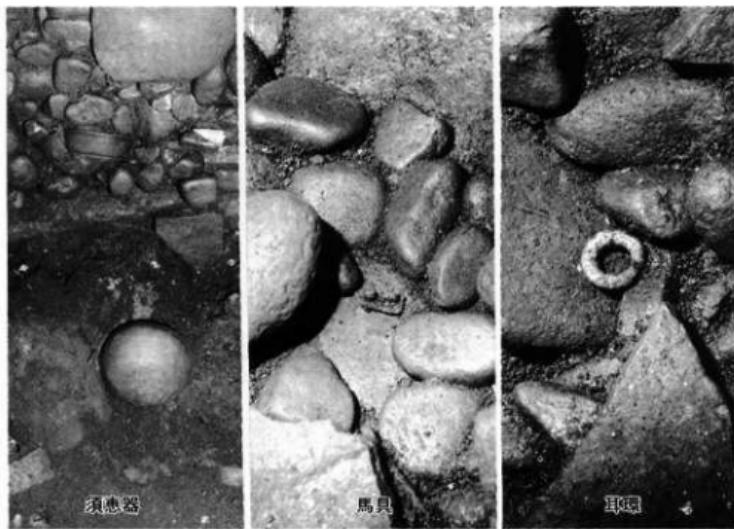


第2号墳側壁

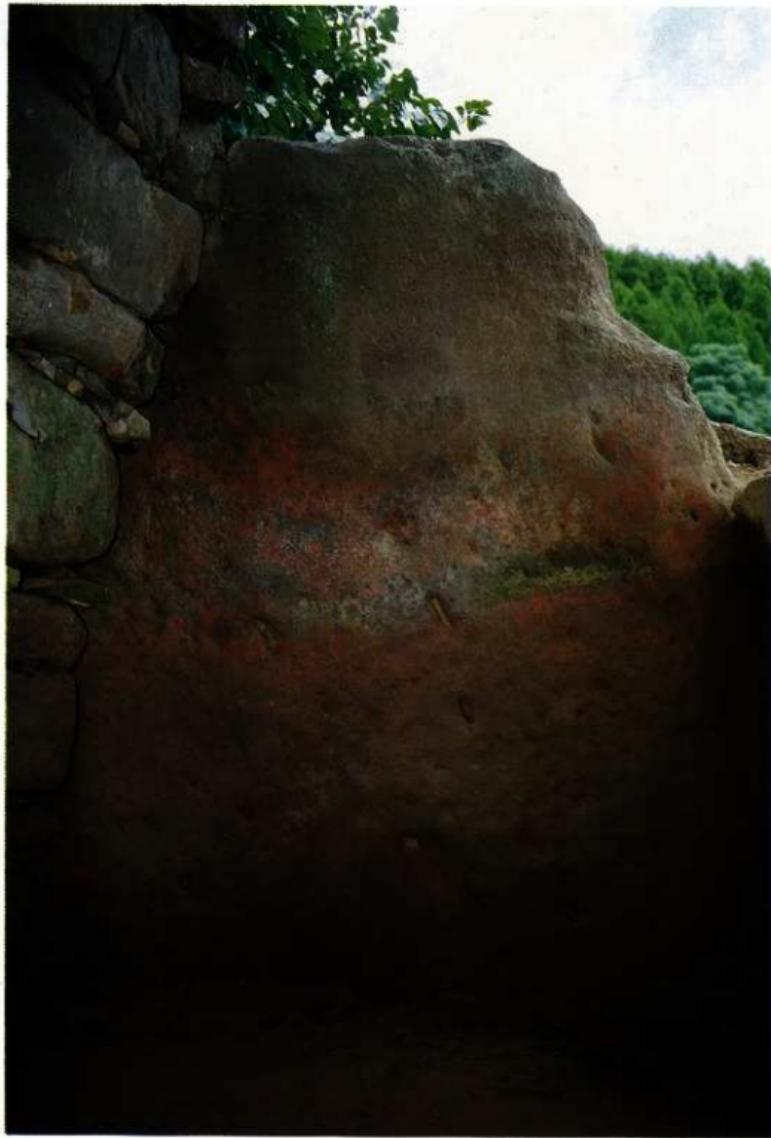


直刀と玉類

第2号墳遺物出土状態(1)



第2号墳遺物出土状態(2)



第2号墳奥壁

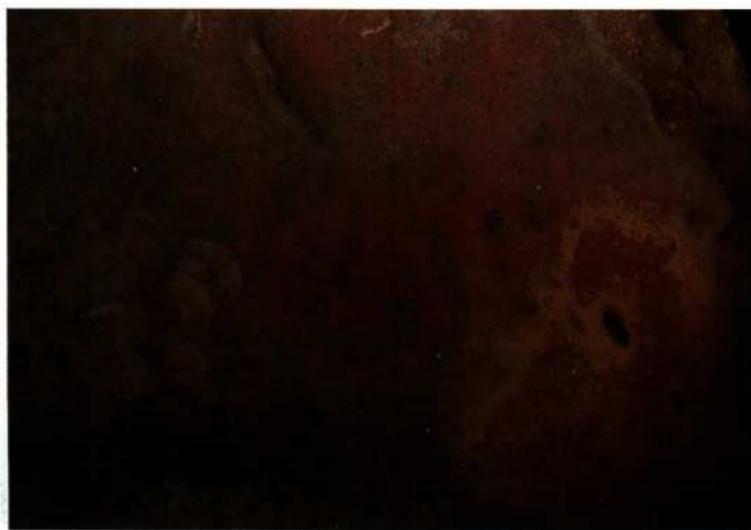


第2号墳壁画（赤外線写真）

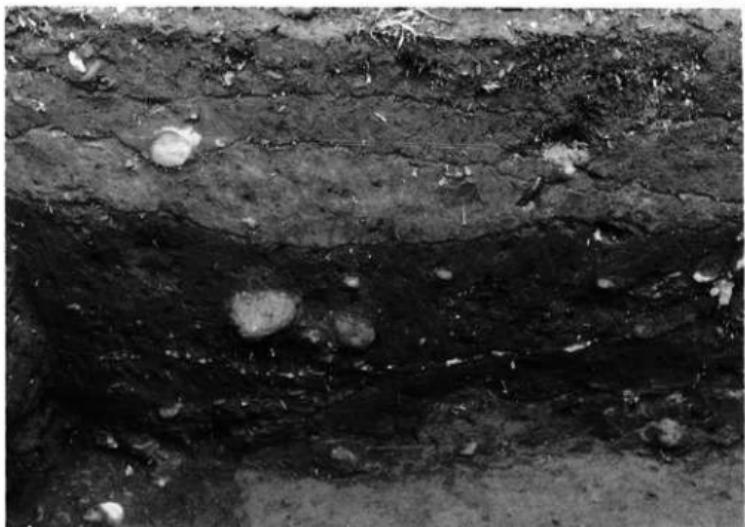


第2号墳壁画（赤外線写真）

图版20



第2号填壁画（上，下）



第2号墳石室掘り方（第2トレンチ）



第2号墳墳端（第2トレンチ）

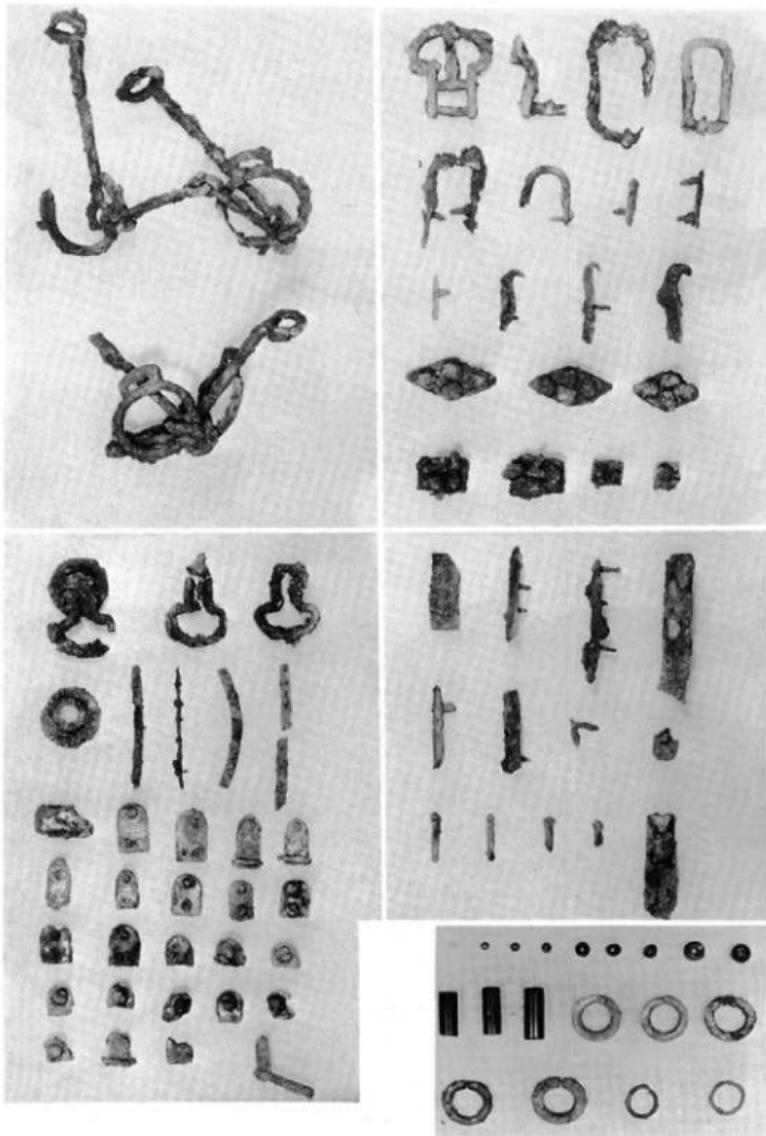
图版22



第3号墳（上、下）



第1号墳出土遺物

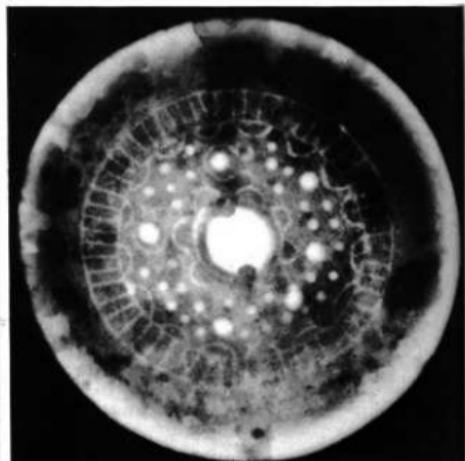
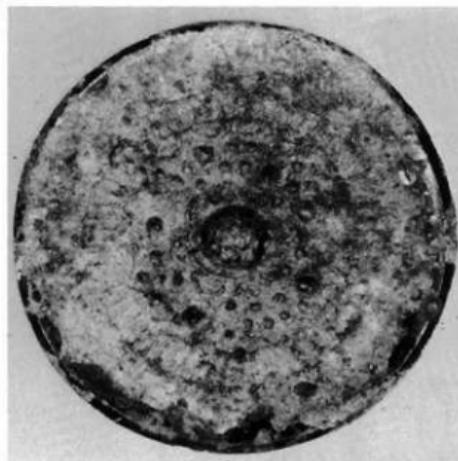


第1号填出土遗物



第1号墳
出土遺物

第2号墳
出土遺物



珠文鏡

同左
X線写真

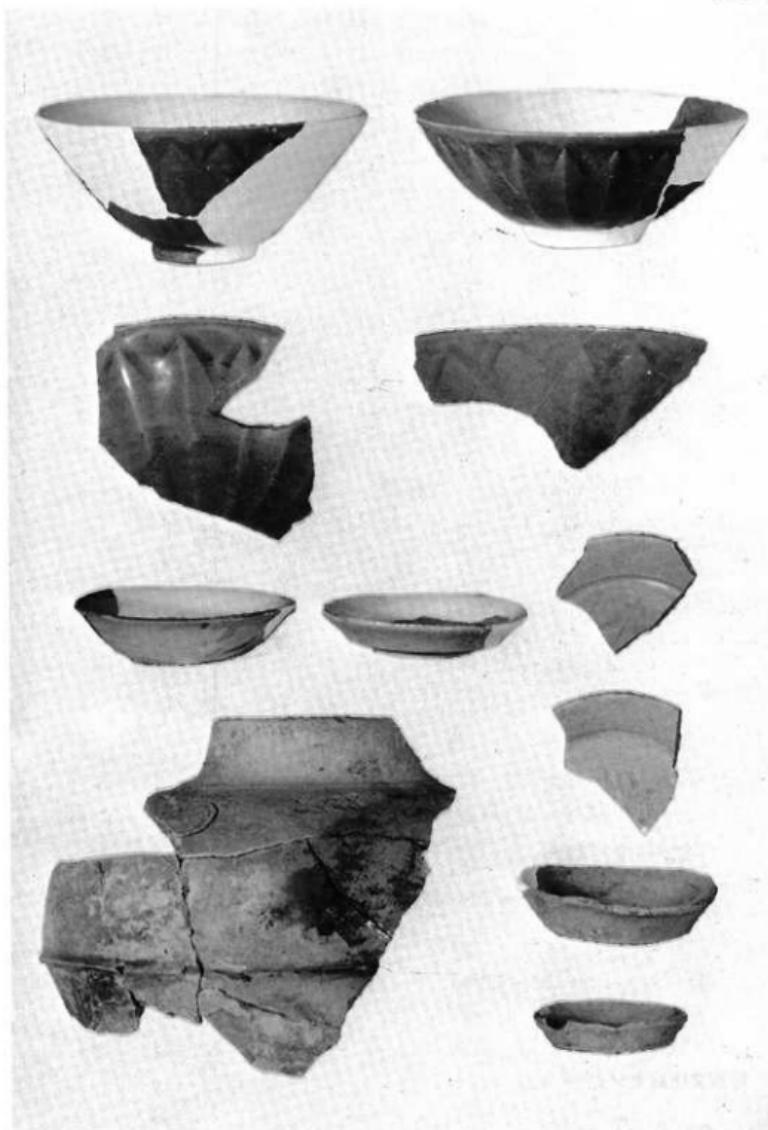
直刀X線写真

↑
IXフィルム 90kv、5mA

←
HSフィルム 90kv、5mA



第2号墳出土遺物



第1号填出土中世遺物

ガランドヤ古墳群

——大分県日田市所在装飾古墳の調査報告——

1986年3月31日

発行　日田市田島2丁目6-1　日田市教育委員会 0973-23-3111

印刷　佐伯印刷㈱

埋蔵文化財センター

61. 6. 27

